

マスターゲーム

自称 シルマン



目次

第1話『夕陽ビール』	1
第2話『大吟醸ビール』	13
第3話『巫女巢里飯店』	26
第4話『ベリー社長賞』	39
第5話『ポニービール』	45
第6話『ハゲタカ』	54
第7話『しる爺』	68
第8話『宮崎県産マンゴー』	81
第9話『網走支社』	93
第10話『ピンクの軽トラ』	101
第11話『ボスの味』	114
第12話『フォークシンガー』	125
第13話『記憶喪失』	133
第14話『あーしゃーせー』	149

第1話『夕陽ビール』

「とりあえずビール！」

この言葉が居酒屋で飛び交っていたのは今や昔。

苦いから飲めないという青年。

プリン体が多くて飲めないという中年。

酒税が上がり経済的に飲めないという残念。

ビールの売れ行きは年々落ち込み、ビール業界は苦境に立たされていた。

この危機的状況を変えるには、どの世代をも虜にするような圧倒的なビールが求められた。

ビールの売り上げがピークを迎える夏。

各ビールメーカーは、こぞって夏の新商品開発に死力を尽くした。

大手ビールメーカーのひとつ

『夕陽ビール』

ビール低迷期にも関わらず、業績を伸ばし続けている、今一番勢いのある会社だ。

それもすべて10年前に5代目社長に就任した

佐原誠也(さわら せいや)

の手腕によるものだった。

本社を六本木に移し、ビルのデザインをビールジョッキにするなど、奇抜なアイディアで話題を集めると、最も力を入れる夏の新商品開発には社員全員が参加出来るようにした。

そして商品化が許された者には、出世が確実に約束される

『ベリー社長賞』

が与えられるのだった。

これは新入社員でも、いきなり役職にもなれるという夢のような賞だった。

夏が近づくにつれて夕陽ビール本社内は、下克上さながら決戦を目前にしたような、興奮と殺気で満ち溢れていた...

「課長！

私が開発した『大吟醸ビール』はどうなってるんですか！？

未だに工場からサンプルが送られて来ないなんて！

こんなことで『ベリー社長賞』に間に合うんですか！？」

営業二課 入社2年目

東 京子 (あずま きょうこ)

課長のデスクに詰め寄る彼女もまた、夏の新商品開発に情熱を注ぐ一人だった。

課長は本社ビルの高層階から見下ろす景色を、コーヒーを啜りながら眺めていた。

「聞いてますか！？ 課長！」

営業二課課長 入社20年目

天神 四太郎 (あまがみ したろう)

彼の姿は、窓ガラスから降り注ぐ夕陽に照らされ、シルエットになっていた。

余裕さえ感じられるその影は、ゆっくりと振り返った。

「完成したよ」

.

夕陽ビール本社

【大会議室】

今年もついにやって来た。

『ベリー社長賞』という出世の片道切符を掛けた決戦。

夏の新商品を決めるプレゼンが始まった。

大会議室内はいつもの会議とは違う、緊張感が漂っていた。

中央の椅子にドンと構える佐原社長の姿が、さらに緊張感を与えた。

プレゼンの順番は公平を期すため、クジ引きで決められる。

営業二課は、開発者として会議に参加していた京子がクジを引いた。

幸か不幸か一番最後の大トリを引き当てた。

トップバッターは経理課だった。

経理課長は壇上に立ち、咳払いをひとつすると力強く声を発した。

「今回、経理課が発表致します商品は、汗で失われた塩分を補給出来る、

『塩ビール』です！」

何とも面白いコンセプトをもとに、軽快にプレゼンは進められていった。
一通りの説明が終わると、サンプルの缶ビールが全員の手元に配られた。
皆一斉にプルタブを開け、一口飲んだ。
すると、険しい顔で確認し合う課長たち。
佐原社長も一口飲むと、すぐに答えを出した。

「こんなもの飲んでたら早死にするわ！」

佐原社長は高血圧だった。

プレゼンで社長に土下座をするという事態。
他の課長たちに失笑されながら、経理課長は身を隠すように席に戻った。
気を取り直して、プレゼンは再開した。

人事課の唐揚げに合う

『レモンビール』

生産管理課の唐辛子の成分カプサイシンを入れた

『レッドホットビール』

商品開発課のアルコール度数を2倍にした

『缶べろビール』

総務課の缶を振るとゼリーになる

『フルフルビール』

どれもパツとしないプレゼンが続いた。
総務課の『フルフルビール』に関しては、佐原社長は試飲さえもしなかった。
そして、とうとうプレゼンは営業二課を残すだけとなった。

壇上に悠然と立ち向かう、天神課長の姿は勇ましかった。
京子は、その姿を固唾を飲んで見守った。

「私ども営業二課がプレゼン致します夏の新商品はズバリ！
『大吟醸ビール』です！」

退屈そうにあくびをしていた連中は、天神課長の言葉で一斉に目を覚ました。

「大吟醸？」

ザワつく会議室内は、明らかに興味を示していた。手応えを感じる天神課長。

京子も祈るように拳を固く握りしめた。

「皆さんもご存知、大吟醸とは日本酒の中で最高級とされています。

その理由に挙げられるのが、米を磨くと言われる精米作業です。

米の半分以上を磨き、中心部分だけで日本酒を仕込むという贅沢な技法によって、雑味のない米の豊かな旨味と爽やかな風味が生まれるのです。

これは日本酒造りにおいて素晴らしい技術です。

私どもは、この技術をビールに応用出来ないかと考えました」

佐原社長が今日初めて、前のめりになって関心を示した。

プレゼン参加者たち全員が天神課長の話に集中した。

「ビールの一番の美味しさとは何か？

たどり着いた答えが香りとホロ苦さでした。

その決め手となるのがホップです。

私どもは、ホップを磨くことで大吟醸のような味わいが作れないかと試みました。

何度も試行錯誤した結果、中心部分までホップを磨くことで、爽やかで上品な香りと軽やかなホロ苦さを生み出すことに成功しました。

贅沢でありながら爽快な味わいは、まさに大吟醸ビールと呼ぶにふさわしい、最高級のビールが完成したのです！」

会議室内は、興味から興奮へと変わっていった。

早く飲ませろと言わんばかりに、サンプルの缶ビールが配られると同時に、皆はプルタブを開けて飲んだ。

佐原社長も缶を口元に運び、ゆっくりと喉に流し込んだ。

目を閉じて味わった後に一言。

「素晴らしい！」

京子は小さくガッツポーズをした。

天神課長も大きく頷き、さらに続けた。

「商品名も色々と考慮し決定致しました。

ホップの中心だけを抽出した大吟醸ビール。名付けて、

『中出し生』です！」

京子は飲みかけたサンプルのビールを吹き出した。
会議室内は「おおー！」という歓声と共に、全員が立ち上がり拍手をした。
まさにスタンディングオベーションだった。
天神課長は両手を広げ、拍手に應えていた。
京子は何が起きたのか分からず、テーブルにこぼしたビールを拭きながら、キョロキョロと周りを見回した...

夏の新商品は厳選なる協議の結果ではなく、佐原社長の一存で、営業二課の、大吟醸ビール『中出し生』に決定した。

夕陽ビール本社
【営業二課】

京子はデスクで頭を抱えていた。
その後ろから、軽やかに肩を叩いたのは天神課長だった。

「東くん、我々の努力の結晶が届いたぞ」

京子は顔を上げると、デスクの上に置かれた 350ml 缶を見た。
大吟醸ビールが霞んで見えるほど、缶の中央にデカデカと『中出し生』と書いてあった。

京子は大きく溜め息をついた。

「どうした？ 溜め息なんかついて。
自分で考えたビールが商品になったんだぞ。
それを自分で売れるなんて最高じゃないか」

京子が夕陽ビールに就職した理由は、酒好きというのもあるが、商品開発に誰でも参加出来る『ベリー社長賞』があるからだだった。
自分で開発した商品を自分の手で売る。
この目標があったからこそ、営業というキツイ職種でも頑張っただけだった。
天神課長が言うように、目標は達成し最高の気分のはずだった。

だが、何か違う...

「課長！『中出し生』って何ですか！？」

私、聞いてないです！」

「ハッハッハッ

商品名というのは、何と言ってもインパクトが命だ！

君が考えた大吟醸ビールは素晴らしい。

だが、商品名としてはどうだろう？

弱すぎる！

そのまま売り出していたら、お客様に知られる前に消えてしまっていた。

それを私が『中出し生』という翼を授け、飛べずに死んでいたであろう、大吟醸ビールを世に羽ばたかせたのだー！

これはもう『ベリー社長賞』は天神四太郎のものと言っても過言ではなーい！」

訳の分からない理屈を叫んでいた。

もう話にならなかった。

「さあ、迷うことは何もない。

名作となるであろう作品は出来たんだ。

後は立派に演技きって、お客様の大歓声を聞かせておくれ。

頼んだぞ、名女優！」

天神課長はすでに『ベリー社長賞』を手にしたかのように、軽いステップを踏みながら課内を後にした。

京子はがっくりと肩を落とした...

.

夜の賑わいを待つ、六本木本社周辺の飲み屋街。

サンプルの缶ビールを保冷バッグに詰め込み、京子は飛び込み営業に出向いていた。

炭火やきとん

【ブー太郎】

『準備中』の札が掛けられた個人店の居酒屋。

気が進まないまま、入口の引き戸を開けた。

「どうもー

笑顔に寄り添う夕陽ビールでーす」

シンとする店内。返事はなかった。

「失礼しまーす」

頭を下げながら店の中へ入った。

カウンター席だけの横長の造り。

奥の厨房で、仕込みをしている店主が見えた。

「どうもー夕陽ビールでーす」

「何ー？ 夕陽ビール？」

あーダメダメ、うちはポニービールだからー」

店主は京子を見ることなく、やきとんの串打ちをしながら答えた。

「自慢の新商品が出来たんです！」

話だけでも聞いて頂けないでしょうか？」

京子は食い下がり、カウンターに身を乗り出して店主を覗き込んだ。

京子は美しかった。

「今忙しいん...」

ふと、顔を上げて京子を見た瞬間、串打ちをしている店主の手が止まった。

「あ、うん...

そろそろ休憩にしようと思ってた所だ。

話ぐらいなら聞いてやろうか？

ん？ ん？」

商品よりも京子に興味を持った店主は、仕込みを止め、のこのことホールに出てきた。

品定めでもするように、京子の体を上から下まで舐め回すように見ていた。

「今回ご紹介させて頂く新商品は、ズバリ申し上げますと、大吟醸ビールです！」

「大吟醸？」

店主はようやく商品に興味を示した。

「はい。

米を磨いて造ると言われる日本酒の大吟醸。

それをヒントに、ビールで大吟醸を造るにはホップを磨くことだと思いつきました。

試行錯誤した結果、ホップの中心部分だけを使うことによって、上品な香りと爽やかな苦味が生まれたのです。

まさに大吟醸と呼ぶにふさわしい、これから来る夏にピッタリのビールが完成したのです！」

「ほう、

旨そうだな、そのビール」

「ありがとうございます！

ビールサーバーの設置などは、うちの方で無償でやらせて頂きますので…」

「いやいや、

で？

その商品は？

飲んでみなきゃ分かんねーだろ？」

確かにそうだった。

だが、京子は急に黙ってしまった。

「？」

店主が不審に思い始めると、京子はようやく保冷バッグに手を掛けた。

じらしてると思われてもおかしくない動きで、サンプルの缶ビールを取り出すと、カウンターに置いた。

店主は首を傾げながら、缶ビールを手にとると衝撃を受けた。

『中出し生』

缶の中央にデカデカと書いてあった。

眉間にシワを寄せ、破裂しそうなぐらい強く握りしめていた。

それを見た京子は恥ずかしくなって下を向いてしまった。

.

「お前なのか？」

「え、はい？」

突然の声に京子は顔を上げた。

すると、鼻息を荒くした店主が、
『中出し生』を京子の顔の前に突き出した。

「お前なのか？ これを考えたのは？」

詰め寄る店主に京子は顔を真っ赤に染めた。

「ち、違います！」

耐えきれなくなった京子は缶ビールを奪い取り、店を飛び出した。

やっぱり無理だ！
『中出し生』なんて商品名！
どうやって売れって言うのよー！

消え去りたい思いで飲み屋街を全力で駆け抜けた。走れるところまで走った。
京子は力尽き、足は前に出なくなり立ち止まった。

「はあ、はあ、はあ…」

少しずつ呼吸を整えると、冷静になっていった。

余計なことを考えるのやめよう。
無になろう。
営業マシーンになるしかない。

気を取り直し、再び営業を試みた。
だが、サンプルの『中出し生』を出した瞬間に、スケベな目で見られるのが耐えられなかった。
その度に、京子は顔を赤らめ店を飛び出した。

もう営業にならなかった。

すでに陽は沈み、飲み屋街が賑わいを見せると、抜け殻になった京子は路地裏にへたり込んだ。

「バカらしい。

セクハラして下さいって宣伝してるみたい」

保冷バッグから『中出し生』を取り出すと睨みつけた。

「こいつのせいだ。

売れないならもう飲んだれー！」

プルタブを開けると、ビールを一気に飲み干した。

「プハー！

味はやっぱり最高じゃない！

何なのよ『中出し生』ってー！」

保冷バッグに詰め込んでいた缶ビールを次々と空けていった。

「アハハハ～～」

すべて飲み干す頃には、完全に酔っ払っていた。

もうどうでもよくなった。

フラフラと歩き出した京子は、六本木の奥地へと迷い込んでいった。

人通りもなく、灯りもない寂れた裏道。

チカチカと電球が消えかかった電飾看板が見えた。京子は引き寄せられるように近づいていった。

伝道コケ師 BAR

【ラブスラム】

伝道師のコケシ〜？

アハハハー

意味わかんない

京子はおぼつかない足取りで店の扉を開けた。

間接照明だけの薄暗い店内。

霧がかかったお香の煙が漂い、ウッドベースだけの BGM が流れる。

5 席ほどの狭いカウンターテーブルの向こう側に異質を放つ、イカつい体の男がいた。

黒光りしたスキンヘッドに、袖を切り落とした黒シャツから見える二の腕は、丸太のよう
に太かった。筋肉の張りを確認しながら何かを磨いていた。

大きなグラス？

違う、昔懐かしい金魚鉢だった。

「あーしゃーせー」

マスターらしき男は、京子を見ずに言った。

京子はフラフラとマスターの正面の席に座った。

「伝道師さ〜ん！

私は今、ヤケになっていま〜す。

導いて下さ〜い」

マスターは金魚鉢を置いた。

ぼんやりと京子の姿を見回した後、瞳の奥を覗き込んだ。

何かを感じ取ると目を閉じた。

次の瞬間、カッと見開いた。

マスターは、京子の目の前にカクテル用のグラスを置いた。

次にシェーカーを振り始めた。

筋肉の動きを確認しながら振っている。

京子にアピールする筋トレのようだった。

シェーカーの蓋を開けると、京子の目の前のグラスに注いだ。

澄みきった透明な液体。

さらにシェーカーを傾けると、赤い物体がグラスの中に落ちた。

ポチャン！

活きのいい真っ赤な金魚だった。

「ん〜？ 何これ？」

「観賞用だ」

マスターは、やり切ったようにシェーカーを洗い始めた。

「フフ、面白〜い！

これでどうやって導いてくれるの〜？」

「つまらない酒を飲んで酔っ払っても、汚したパンツの色は変わらない。

誤魔化して綺麗に見せようとすればするほど汚くなる。

だが、洗おうが何しようが所詮パンツはパンツだ。

捨てる勇気があれば、後はあんたの思い通りだ」

京子は衝撃を受けた。

「すごいわ！

何を言ってるのか全然分からない！」

京子は目の前のグラスを一気に飲み干そうとした。

ブフッ！

金魚を吹き出した。

宙を舞った金魚は、マスターの分厚い胸板に当たってカウンターに落ちた。

「観賞用だと言っただろ」

静まり返る店内。

ピチピチと跳ねる金魚の音だけが虚しく響いていた...

第2話『大吟醸ビール』

翌朝、京子の気持ちは晴れ、スッキリとした気分で会社に向かった。
午前中は事務作業をこなし、午後から再び営業にチャレンジする。
保冷バッグに、
大吟醸ビール『中出し生』を詰め込むと、颯爽と営業二課を後にした。

最初に訪れたのは個人店の居酒屋。

炭火やきとん

【ブー太郎】

京子は新たな気持ちで、引き戸を開けた。

「どーもー
笑顔に寄り添う夕陽ビールでーす！」

勢いよく店に入ると、店主がカウンター席に座っていた。
休憩中だったのか煙草をフカしていた。
京子に気付くと鼻で笑った。

「またお前かー
何しに来た？
今日はパンツでも脱いで行くかー？
ハッハッハッ」

「昨日は取り乱してしまい、大変申し訳ございませんでした。
もう一度チャンスを頂けないでしょうか？」

京子は深々とお辞儀をした。

「チャンスも何も、うちはポニービールだって言ってんだろ」

「はい。」

ですが、大将にはどうしても新商品の試飲をして頂きたく戻って参りました」

「は？ どういうことだ？

昨日は奪い取って逃げただろ」

「申し訳ございません！

上司が勝手に付けた『中出し生』という商品名をどう説明していいか分からず逃げ出してしまいました。

ですが、大吟醸ビールという味の方は私が考えたビールなんです。試飲もされず誤解されたままでは夜も眠れません。

味には本当に自信があるんです！

是非、飲んでみて下さい！」

京子は保冷バッグから『中出し生』を取り出すと、頭を下げ両手で差し出した。

「フン、どんな事情か知らないが、俺が飲んで不味いって言ったらどうするんだ？」

京子は顔を上げた。

「その時は、大将の言うことを何でも聞きます！」

「ハッハッハッ、面白い！

じゃあ、さっきは冗談で言ったが、不味かったら本当にお前のパンツを置いていけよ。分かったか？」

「はい、覚悟は出来ています！」

京子の眼は真剣だった。

「ほう、昨日とは別人だな。

よし、じゃあ俺も真剣に判断してやる」

店主も顔つきを変えると、缶ビールを受け取りプルタブを開けた。

ゆっくりと口に運び、一口飲んだ。

すると、難しい顔をして缶をカウンターに置きかけた。

だが、再び口に戻すと、そのまま一気に飲み干した。

「ふう」

最後には満足そうな表情を浮かべた。

「ワザと不味いって言ってやろうと思ったが体は正直だ。
全部飲み干しちゃった」

「あ！ あ！
ありがとうございます！
ありがとうございます！」

京子はペコペコと何度もお辞儀をした。

「しょうがねーな。
店の中を片付けるとするか」

「はい？」

「こいつのサーバーを置くにはスペース作らねーと。
だろ？」

店主は空になった『中出し生』の缶を振ってウインクした。

「え？ え？ えー！
やったー！！」

京子は両手を挙げて無邪気に飛び跳ねた。
大吟醸ビールが、お客様に初めて認められた瞬間だった。

その後も、昨日逃げ出してしまった店から営業をかけた。
京子は『中出し生』をイジられても冗談で返せるまでになっていた。
そして、フザけた商品名からは想像出来ない大吟醸ビールの味の良さ。そのギャップに
店主たちは感動し次々と契約を結んでいった。
勢いに乗った京子は、数日間で六本木本社周辺の飲み屋街をほぼ制覇してしまった。

さらに続く怒涛の契約ラッシュ。
大吟醸ビール『中出し生』
発売前にして京子は、新規顧客契約件数ダントツの1位に輝いた...

.

夕陽ビール本社

【営業二課】

「すごいじゃないか、東くん！
飛ぶ鳥を落とす勢いとは、このことだな。
で？
どんな奥の手を使ったんだ？」

天神課長が肩に手を掛けようとしたが、京子はその手を払った。

「課長、奥の手って何ですか？
私の大吟醸ビールは、そんな手を使わなくても売れちゃうんですよ」

京子はデスクの上に置いてあった
『中出し生』をバッグに入れると髪をかき上げた。
そのまま振り返らずに手を振って、営業二課を後にした。

「エクセレント！」

天神課長は両手を上げて見送った...

.

チカチカと電球が消えかかった電飾看板。

伝道コケ師 BAR

【ラブスラム】

京子はハンドバッグの中の『中出し生』を確認すると、深呼吸をして店の扉を開けた。

間接照明だけの薄暗い店内。
霧がかかったお香の煙が漂い、ウッドベースだけの BGM が流れる。

シラフで見ると何とも怪しい店内。
マスターは袖を切り落とした黒シャツ姿で、盛り上がった腕の筋肉を確認しながら、何かを磨いていた。

黒光りした木製のバットだった。

「あーしゃーせー」

マスターは京子を見ずに言った。

「今日はマスターに、お礼を言いに来ました」

京子は、マスターの正面の席に座った。

マスターは気にすることなく、バットを入念に磨いていた。

「実は私、

夕陽ビールで営業をやってるんです」

カラーン！

マスターはバットを落とした。

無表情のまま拾い上げると、後ろの壁掛けにバットを戻した。

「先日、マスターが私を導いてくれた言葉。

意味は分からなかったけど、体の芯には届いてたみたいです。

自分でも怖いぐらいの自信がつきました。

お陰で営業成績 No.1 を獲ることが出来ました。

本当にありがとうございました！」

背中を向けたままのマスターに、お辞儀をした。

そしてバッグから『中出し生』を取り出すと、カウンターに置いた。

「これ、夏の新商品で私が考えたビールです。

よかったら飲んでみて下さい」

マスターは、ようやく振り向いた。

ゆっくり手を伸ばし缶ビールを掴むと、中央にデカデカと書かれた『中出し生』の文字を睨みつけた。

「あ！ あ！ 商品名は見ないで下さい！

上司が勝手に付けたヤツなんで。

味の方を見て下さい。

私の自信作です！」

マスターは無造作にグラスを取り出すと、缶を開けビールを注いだ。
光りに透かして色を少し確認すると、一気に飲み干した。

京子は顔色をうかがった。

「どうでしょうか？」

マスターは目を閉じ、遠くで感じる味を引き寄せるとポツリと言った。

「ホップを磨いたな？」

「え！？ ええー！！」

「62% から 65% てところか。」

あえて生じゃなく乾燥ホップを使うことで、軽くなり過ぎるのを抑えてるな」

「す、すごい！

ちょっと飲んだだけで、そこまで分かっちゃうなんて...

やっぱりそうだ！

マスターは何でも見えちゃう伝道コケ師なんだわ！」

京子は感動して目をキラキラさせた。

マスターは構うことなくジョッキを取り出すと、サーバーから生ビールを注いだ。

京子の前にスッと差し出すジョッキは、ビールと泡がキッチリ 7 対 3 になっていた。

「あんたなら違いが分かるだろう」

「え？ え？」

試した側から急に試される側になった京子。

心を落ち着かせ、ジョッキの生ビールを見つめた。

美しい宝石のような琥珀色。

吸い寄せられるようにジョッキに手を伸ばすと、ゆっくりと口に運んだ。

「！！」

一口飲んだ京子は衝撃を受けた。

コクと軽やかさ、芳醇な苦味と甘さ、相対する味が複雑に絡み合い、ひとつのエネルギーとなって喉を通り抜けていった。

喉の渇きではなく、幸福感が満たされていく。

飲み出したら止まらなかった。

ジョッキを一気に空にした。

生命の息吹を感じさせるビールだった。

「す、すごいです！

こんなビール初めて飲みました！

ホップが弾けてるというか、飲んだ瞬間に世界が広がるというか...

すいません。

私に分かるのはそれぐらいです...」

「いや、上出来だ」

マスターは頷くと、オカリナを磨き始めた。

「教えて下さい！

このビールは何ていうビールですか？」

「ポポッポポポポー」

マスターはオカリナを吹いて答えた。

「いえ、全然分かんないです」

.

「『さきっぽ生』だ」

マスターはハッキリと言葉にしたが、京子はそんな名前のビール聞いたこともなかった...

.

東京タワー

【展望台】

「東京タワービール下さい」

「333 円です」

東京タワーの絵が描かれた 350ml の缶ビールとお釣りを受け取った。

京子は外回りの合間に、東京タワーに来ていた。

都会の景色を眺めながら、缶ビールを開けた。

グビグビと美味しそうに飲む京子。

「プハー！

東京タワービールって言うけど、中身は結局ポニービールの『一本縛り』なのよね」

東京タワーと提携してポニービールは、主力商品をご当地ビールとして売り出していた。

実は夕陽ビールも主力商品の

超辛口ビール『スーパーツライ』

を持って提携の話に参入したが、結果ポニービールに取られ負けてしまった。

私の大吟醸ビールだったら勝ててただろうか？

多分勝てたと思う。

今飲んでみて確信した。

自分の大吟醸ビールは、今や巷のビールの中では一番じゃないかとさえ思い始めていた。

だが、昨日飲んだ『さきっぽ生』は、その上をいっていた。いや、次元を超えていた。

マスターは私に、上には上があるということを教えたかったのだろうか？

それにしてもあの『さきっぽ生』

どこのメーカーから出しているんだろう？

京子は広がる景色の先を見ながら残りのビールを飲み干した...

.

安さが売りの立ち飲み屋は、六本木の穴場的場所にも関わらず、連日連夜仕事帰りのサラリーマンで賑わっていた。

立ち飲み居酒屋

【ピンコ】

「珍しいな、東くんから飲みに誘うなんて」

ガヤガヤとした店の片隅で、ホッピーを飲みながら天神課長は言った。

「そうですね。

営業でトップになっても、天神課長は祝ってくれないので」

嫌味っぽく言う京子は、生ビールをすでに飲み干し、日本酒の冷やを注文した。

天神課長も追うようにホッピーの中を注文した。

「いやいや、私が『ベリー社長賞』を獲った後に、一緒に祝うつもりだった」

「言い訳ですか？

なーんて、冗談ですよ。

それに『ベリー社長賞』は開発者である私のものだと思っておりますので」

「おいおい、何を言ってるんだ。

ここまで来て裏切るというのか？」

「裏切るも何も『ベリー社長賞』は佐原社長が決めることですし...

ていうか、社長賞の話やめませんか？」

「そうだな。

20年も会社に尽くしてきた私と君とじゃ比べものにならんしな」

天神課長は、ホッピーの中と一緒に頼んだ、下処理もしてないような臭いモツ煮をつまむと、満足そうな顔をした。

「突然なんですが、ちょっとお聞きしたいことがありまして」

京子も日本酒の冷やをお猪口に注ぎ、クイッとやりながら話した。

「どこのメーカーか分からないんですが、

『さきっぱ生』というビールをご存知ですか？」

カチャーン！

天神課長は箸を落とした。
途端に表情が険しくなる。

「...何故だ。
なぜ君がそのビールを知ってるんだ？」

「え？
先日、ここの近くの BAR で飲みましたけど」

「そんなバカな...」

天神課長の顔色が見る見る青ざめていく。
何かに怯えているようにも感じた。

「課長、大丈夫ですか？」

天神課長は、ハッとして京子を睨みつけた。

「いいか、東くん！
そのビールのことは忘れるんだ！
そして二度と、その BAR にも近づくんじゃない！」

吐き捨てると、慌ててレジに行き会計を済ませた。

「え？ 何？
課長ー！ 私のまだ入ってるー！」

手を挙げ徳利を振ったが、天神課長は振り返ることなく、立ち飲み屋を出て行ってしまった。

「何なのよ...
もう、わけわかんない！」

訳が分からなくとも、酒は残さず飲む京子。
日本酒を飲み終える頃には、好奇心を抑え切れなくなっていた...

.

チカチカと電球が消えかかった電飾看板。

伝道コケ師 BAR

【ラブスラム】

近づくなと言われると余計に気になる。

あのビールには一体何があるのか？

京子は高鳴る気持ちを抑え、店の扉を開けた。

何度来ても怪しい店内。

マスターは相変わらず、袖を切り落とした黒シャツ姿で、盛り上がった腕の筋肉をアピールするように何かを磨いていた。

長ナスだった。

「あーしゃーせー」

マスターは京子を見ずに言った。

この雰囲気慣れつつある自分が遅しい。

京子はマスターの正面の席に座ろうとしたが先客がいた。

金髪の角刈りに派手な化粧。

パッションピンクのパーカーが眩しかった。

京子は避けながら、奥のカウンター席に座った。

「マスター

『さきっぽ生』ください」

注文すると金髪の角刈りはキッと京子を睨みつけた。

「何なのこのブス！

どうしてその名前知ってんのよ？」

いきなり絡まれた。

だが、京子は怯むことなく言い返した。

「は？

珍獣みたいなオカマには関係ないわ」

金髪の角刈りは、カッとなり立ち上がった。

マスターは、すぐさま長ナスを金髪の角刈りの口に突き刺した。

「お前は黙ってろ」

マスターには逆らえないのか、金髪の角刈りはショボンとなり椅子に腰を下ろした。

ポリポリとナスを食べ始めた。

マスターはジョッキを取り出し、流れるような動きでサーバーから生ビールを注ぐと、キッチリ 7 対 3 の割合で京子の前に差し出した。

「『ベリー社長賞』だ」

「え？」

何で？

どうしてマスターが知ってるの？

これもまた伝道コケ師だから？

京子は動揺を隠せないまま、生ビールを一口飲んだ。

「美味しい…」

体中にエネルギーが行き渡るような感動的な味わいは、前回飲んだ時と変わらなかった。

「何でマスターは、

『ベリー社長賞』を知ってるんですか？」

京子はやっぱり気になって聞いてみた。

「水着と下着の境界線は心の境界線。

家の中で水着を着たら、

それはもう下着なんだ」

京子は衝撃を受けた。

「やっぱりスゴいわ！
さっぱり分かんない！」

京子は残りのビールを流し込むように飲んだ。

二人の会話に入っていけない金髪の角刈り。
恨めしそうに口を開いた。

「マスタ～
麻婆茄子まだ～？」

「ナスはどこいった？」

「えっ！？
マスターがさっき私の口に入れたから食べちゃったわよ！」

「そうか、じゃあ注文したことを忘れろ」

「ええ～～！」

金髪の角刈りは悔しそうに酒を飲み、ブツブツ言いながら京子を睨んでいた...

第3話『巫女巢里飯店』

ついに夏本番を迎えて発売される
大吟醸ビール『中出し生』
夕陽ビールは、大ヒットの予感に興奮と期待が高まっていた。

忙しなく準備に追われる営業二課。
天神課長はというと、立ち飲み屋での一件以来ずっと険しい顔をしていた。
それどころか京子とは、一切目も合わせなかった。

「もう～
意味分かんない！」

京子はそんな課長に構ってる暇はなく、『中出し生』納品初日、契約店舗全店の挨拶回りが待っていた...

.

「ありがとうございました！
今後とも、夕陽ビールをよろしくお願い致しますー！」

挨拶回り最後となる店舗の前で、深々とお辞儀をする京子。

店主も快く手を振って店の扉を閉めた。

.

「ひえ～
やっと終わった～」

ようやく目まぐるしい忙しさから解放されると、時計の数字は15時を過ぎていた。
朝から何も食べていない京子。

「ダメだ～

お腹空いて死にそ〜」

ランチタイムも終わり中途半端な時間帯。
営業している店はほとんどなかった。
この際、食べれば何でも良かった。
ふと、目線の先に中華屋らしき赤の看板が見えた。

幻の中華
【巫女巢里飯店】

みこすりはんてん？

何とも怪しい店名だった。
だが、入口には『営業中』の札が掛けられている。
他を探せるほど、京子に体力は残っていなかった。
立て看板に書かれた定食メニューから麻婆豆腐定食を見つけると、フラフラと店内に入っていった。

天井に赤く灯る提灯。レンガ貼りの壁には龍の絵が描かれ、中央には回転式の丸テーブルが置かれていた。
いかにも中華料理店という内装だった。
静まり返った店内に客は誰もおらず、従業員さえいないように見えた。

「すいませ〜ん」

京子は声を振り絞り、近くのテーブル席に腰掛けると、力が抜けた。

「麻婆豆腐定食くださ〜い」

ダラーンと上を向いたまま注文する。

「はい！
いらっしゃいまほ〜」

厨房の奥から奇妙な声が聞こえてきた。

嫌な予感がした。

京子はパッと声のする方を見た。

すると、シナシナした気持ち悪い動きで現れた店員は、パッションピンクのチャイナドレスに金髪の角刈りだった。

「ああー！！」

二人は同時に叫んだ。

「ちょっと何しに来たのよ！
このスケベ女！」

最初に仕掛けたのは、金髪の角刈りだった。

「はあ！？
何で私がスケベ女なのよ！」

「そりゃそうでしょ！
マスターにいきなり、
『さきっぽだけ入れて下さい』
なんて言う女。
スケベ通り越して変態よ！」

「バッカじゃない！
言っていないわよ！ そんなこと！
それよりここの店名は何？
『みこすりはんてん』
だなんて、よっぽど変態じゃない！」

「何よ！
この店は私、玉梨 有雄 (たまなしありお)
の最高傑作よ！
シロートがわかった風な口聞かないで！」

「ちょっとちょっと！
あんたの名前もややこしいわね。
アリなの？ ナシなの？ どっちなの？」

「はあ？
本当いちいちムカつくわ！ この欲求不満女！
いいわ、

あんたさっき麻婆豆腐頼んでたわね？
とっておきのを食わしてやるわ」

そう言う和有雄は、ツカツカと厨房に入っていった。

「いや～～！
そこは普通のにして下さ～い！」

京子の叫び声は有雄の耳には届いていなかった。

カッコン、カッコン、シャーッ
コワン、コワン、カッカッ

厨房から中華料理店特有の音が聞こえて来た。
同時に食欲をそそる良い香りがしてくる。
悔しいが何でもいいから早く食べたかった。

数分後、音がなくなると木の板に土鍋を乗せて有雄が現れた。
京子の前にドンッと荒々しく置いた。

「マスターと私は強い絆で結ばれているの！
ケツ出しながら入って来ないで！」

「はあー？ そんなことするわけないし！
それよりこれ本当に麻婆豆腐？」

「有雄特製『激辛麻婆赤まむし』よ。
これでも食べて、一人でムラムラしてなさい！」

「げげ…」

唐辛子と花椒がそのまま入った真っ赤な油に、赤まむしのブツ切り肉がグツグツと煮えている。
グロテスクな上に熱くて辛そうだったが、京子の食欲は限界を超えていた。
レンゲを掴み、土鍋に食らいついた。

「熱っ！ 辛ーっ！」

一口食べただけで全身の毛穴が開き、額から汗が吹き出した。

「あらやだ、
もう潮吹いちゃったの？
さすがスケベ女ね。
オーホッホッ！」

巨大な扇子を優雅に仰ぎ、高飛車に笑う有雄だった。

京子の口の中は火が出そうなくらい辛かったが、赤まむしをすくうレンゲが止まらない。
汗も止まらない。
悔しそうに食べ続ける京子の頬に伝うものは、もう汗だか涙だか分からなかった...

.

夕陽ビール本社
【営業二課】

パソコンを立ち上げると、社内掲示板に
【ベリー社長賞】と書かれた項目があった。
クリックしてページを開いた。

~~~~~

【ベリー社長賞受賞者】

商品名『大吟醸ビール 中出し生』  
開発者『天神四太郎 (あまがみ したろう)』

受賞式は、○月○日の午前 10 時より、大会議で行われます。各課より 2 名ずつの参加を  
願います。

~~~~~

開発者 天神四太郎！？

どういうこと？

京子は咄嗟に課内を見回したが、天神課長の姿は見当たらなかった。

こんな強引な嘘が通用するの？

『さきっぽ生』の話を. してから天神課長は、人が変わってしまったように思えた。
まずは、そこから調べる必要がある。

京子は掲示板のページを閉じた...

【総務課】

総務課長

鳥島 倫太郎 (とりしま りんたろう)

鳥島課長は、総務一筋 30 年。

社内の蛍光灯の本数から不倫事情まで、すべてを知り尽くしている。

堅物で知られているが、実は情に厚い男でもあった。

鳥島課長はデスクの上の山積みになった折り紙と向き合い、黙々と鶴を折っていた。

「鳥島課長、お忙しい所すみません」

京子はそっと話しかけた。

「そう思ったら話しかけないでくれ。

繁忙期だっていうのに、部長クラスの間が 3 人も入院した。

いくら鶴を折っても折っても間に合わん！」

「千羽鶴ですか...

総務課も大変ですね」

鶴を折るのに集中していた鳥島課長だったが、ふと顔を上げた。老眼鏡を下にずらし、まじまじと京子の顔を見た。

「君は確か、天神の部下だな？

営業二課が何の用だ。

ベリー社長賞を自慢しに来たのか？

それとも、うちの総務課がプレゼンした『フルフルビール』をバカにしに来たのか？」

「とんでもございません。

夕陽ビールの広辞苑と言われる鳥島課長に、ちょっとお聞ききたいことがありますて...」

「フン、
今時、広辞苑なんて使うやつはいない。知りたいことがあれば、スマホで調べなさい」

鳥島課長は取り合わず、再び鶴を折り始めた。

「『さきっぽ生』」

京子はボツリと言った。
瞬間、鳥島課長の鶴を折る手が止まった...

【資料室】

鍵の掛かった扉の前で、京子に鳥島課長は鍵を渡した。

「君がどこで『さきっぽ生』の名前を知ったかは聞かん。
だが、その先を知ると天神の部下ではいられなくなるぞ」

「構いません。
どんな覚悟も出来ています」

「そうか。
私は忠告した。後は好きにしてください。
もし営業二課に居られなくなったとしても、総務課は君のような熱い若者を随時募集
中だ」

そう言い残すと、鳥島課長はその場を去って行った。
京子はその背中にお辞儀をすると、意を決して資料室の扉を開けた。

埃っぽい室内は棚がいくつもあり、色んな項目のファイルがビッシリと並んでいた。

『さきっぽ生』を口にしたら天神課長は恐れた。
夕陽ビールの社員でもない BAR のマスターが『ベリー社長賞』を知っていた。

この二つを結びつけるものは何か？

まずは、過去の『ベリー社長賞』を調べてみることにした。

京子はファイルを端の棚から探し始めた。

項目を指で追いながら、次々と探していく。資料室の中央の棚に差し掛かった時、それはあった。

『年度別ベリー社長賞』

マジックで書かれた段ボール。京子は持ち上げ、フラつきながらもドサッと床に置いた。
すぐさま中を開けて見る。

佐原社長が社長に就任してから始まった

『ベリー社長賞』

2011 年度から去年までの 10 年分のファイルが詰まっていた。

「あれ？」

京子は 5 年前のファイルだけ 2 冊あるのに気付いた。

【2017 年度ベリー社長賞

受賞者ナシ】

【2017 年度ベリー社長賞

受賞者ナシ】

受賞者ナシ？

なのに同様のファイルが 2 冊あるのはどういうことだろう？

京子は 2017 年度のファイルを抜き出した。

ファイルを開き、ページをめくっていく。

そこに書かれていたのは、事細かに記されたビールの製造方法だった。

パラパラと読み進めていくと、気になるページがあった。

『ホップの新芽の部分だけを使い、生命力を旨味に変える』とあった。

京子が考えたホップを磨く大吟醸ビールと何となく似ていると思った。

そして、最後のページには商品名と開発者が記されていた。

—————

商品名『さきっぽ生』

開発者『天神 四太郎 (あまがみしたろう)』

「え! ?

さきっぽ生? 天神 四太郎?」

もう一冊も開いた。

全く同じだった。

だが、よく見比べると異なる箇所が二つあった。

一つ目は原材料の部分。

天神課長の方は、

『ホップ』

と書かれているのに対して、もう一冊のファイルには、

『新種のホップ』

とあった。

そして、二つ目の違いは最後のページ。

商品名『さきっぽ生』

開発者『升田 餅子男 (ますた べしお)』

ますたべしお〜?

誰?

入社2年目の京子は、そんな名前の社員聞いたこともなかった。

すぐさま棚を振り返り、社員名簿を探した。

それはすぐに見つかった。

だが、夕陽ビールの本社には二百人以上の社員がいる。探し出すのは容易ではなさそうだった。

升田餅子男はすでに辞めているかも知れない。

確実にいたであろう 2017 年度のファイルから探し始めた。

.

いた。

升田餅子男はすぐに見つかった。
添えられた写真を見た瞬間、京子は声を上げた。

「マ、マスター！？」

黒光りしたスキンヘッドに鋭い眼光。今よりさらにイカつい印象だった。
だが、その人物は確実にマスターだった。
配属先を見ると、営業二課とあった。

「ウソでしょ！？
この顔で営業行くのー？」

京子が目的を忘れかけた瞬間、後ろで声がした。

.

「何をしてるんだ？ こんな所で」

咄嗟にバツと振り返った。

その先にいたのは、一切の表情を消した天神課長だった。

ゆっくり京子に近づくと、散らばったファイルを見下ろした。

「忘れろと言ったのに…」

京子は恐怖を感じ、後ずさりした。

「升田は死んだんだ。
今更、掘り返すこともないだろう」

天神課長は不気味な笑みを浮かべると、ファイルを片付け始めた。

「嘘よ！
升田さんはBARのマスターとして、ちゃんと生きているわ」

「そんなはずはない！
君が見たのは亡霊だ。
升田は私が考えた『さきっぽ生』のレシピを盗み『新種のホップ』と書き換えることで、
自分の物にしようとしたんだ」

「え？」

「ところが、升田は本当に『新種のホップ』を探しに中東に飛び立った。
だが、突如勃発した内戦に巻き込まれ、中東の地で奴は死んだんだ」

天神課長はファイルを片付け、棚に戻し終わると京子に手を差し伸べた。

「さあ、もう気が済んだろう。
一緒に仕事に戻ろう」

「いや！」

京子はその手を払った。

「じゃあ聞くけど、何で『さきっぽ生』は受賞者ナシになってるの？」

「そんなものは社長の気まぐれだ。
商品化目前になって、やっぱり味が気に入らないと言い出し、すべてが水の泡となった」

「違う...
そんなはずないわ！
社長の舌はバカじゃない！
あの『さきっぽ生』を飲んで気に入らないはずがない！」

天神課長は溜め息をつくと、怒りをあらわにした。

「何でいつも君はそうなんだ！
世間知らずの小娘が、出しゃばるんじゃない！」

大声でねじ伏せようとしたが、京子は怯まなかった。

「そういうことね...

『さきっぽ生』の製造レシピを盗んだのは...

あなたよ！」

天神課長は表情を消した。

「あなたが商品開発をしている所を見たことがない。
『ベリー社長賞』を欲しがっているのに、何でだろうとずっと不思議に思ってた。
でもその理由が分かった。

あなたは味音痴なのよ。

それに気付いたのは、この前行った立ち飲み屋でのモツ煮よ。あんなクソみたいなモツ煮を美味しそうに食べてた。
そんな人にあの『さきっぽ生』を造れる訳がない。
今回もそうよ！
商品名だけ付けて開発者と偽り、私の大吟醸ビールを奪った。
天神課長、あなたはただの泥棒よ！」

まくし立てる京子をうっすらと睨む天神課長。
その目の奥には殺気がこもっていた。

「ようやく手にしたんだ...
何の苦勞も知らんお前なんか
『ベリー社長賞』などやるものか...」

ブツブツ言いながら天神課長は、京子の首を目掛けて両手を伸ばした。

「いやー！」

京子は咄嗟に両手で自分の顔を覆った。

が、
何も起こらなかった。

ゆっくり手をずらし、目の前を見た。
すると、黒光りした丸太の様な二の腕が、天神課長の首を締め上げていた。
すでに白目を剥き、口から泡を出している。
締め上げた腕の力を抜くと、天神課長はドサッと床に落ちた。

「マスター！？
どうしてここに...」

「見せたら最後、全部までってヤツだ。

だが、本当は最後じゃなく始まりなのかも知れない」

「すごいわ。

こんな時でも全然分かんない！」

恐怖で硬直していた体。

安心して力が抜けると、京子はマスターの分厚い胸板にもたれかかった。

マスターは、二の腕の筋肉の張りを確認しながら、ゆっくりと京子を抱き寄せた…

第4話『ベリー社長賞』

夕陽ビール本社最上階

【社長室】

「失礼します」

京子は社長室の重厚な扉を押し開けた。

広々とした室内の奥で、最上階の景色をバックに、本草の椅子にドッシリと腰掛ける佐原社長の姿が見えた。

京子は臆することなく近づくと、巨大なデスクの上で、佐原社長は一人で将棋を指していた。

「5年前の『ベリー社長賞』

商品化されることなく消えた、

『さきっぽ生』を覚えていらっしゃいますか？

商品化されなかった理由は、佐原社長が味を気に入らなかったからと聞きました。

開発者の天神課長は再度、味の調整もせずにあっさりと諦めてしまったそうですね。

何故だと思いますか？

しなかったのではなく、出来なかったのです」

佐原社長は、腕組みをして将棋の駒を睨みつけながら唸った。

京子は続けた。

「開発者としてプレゼンした、

『さきっぽ生』は天神課長が考えたものではなかったからです。

本当の開発者は、5年前営業二課にいた、升田 餅子男さんです。

そして本物の『さきっぽ生』は、
『新種のホップ』があって初めて、完成するビールだったのです。
その『新種のホップ』を探しに中東まで行った升田さんは内戦に巻き込まれ行方不明になりました。

それを知った天神課長は升田さんの製造レシピを盗み、原材料の部分
『新種のホップ』をただの
『ホップ』と書き換えることで、さも自分で考えたビールかのようにプレゼンしたんです！

今回の新商品も同じです。
大吟醸ビールを開発したのは私です。
なのに天神課長は『中出し生』という名前だけを付けて開発者と偽り、私から奪ったのです。

『ベリー社長賞』は本来、社員全員のモチベーションを上げる為に作られたものだと思います。
上司も部下も関係なく、平等に与えられるからこそ、皆んな頑張れるんだと思います。
なのに天神課長のように、自分では何の努力もせずに、他人のものを奪って受賞を狙う。
出世の為なら不正を働いても構わない、そんな汚れた賞なんですか？

『ベリー社長賞』は！？

私は夕陽ビールに入社出来たことを誇りに思っています。
今一度、佐原社長の正しい判断をお願い致します！」

京子は言い終わると、深々とお辞儀をした。

佐原社長は将棋の駒を見て「あ！」と何かに気付いた。

「いかんいかん。
私とした事が二歩だった。
チョンボはちゃんと正さないとな」

佐原社長は歩の駒を指で弾いた...

大吟醸ビール『中出し生』は、商品名のインパクトより味の良さが話題となり、発売当初から記録的な売り上げを見せた。

ついには業界売り上げ NO. 1 まで昇り詰めると、ビール低迷期に風穴を開けたと称賛された…

夕陽ビール本社

【営業二課】

「木下さん、

『六本木ストコドッコイ祭り』

はどうなってる？

一緒に『中出し生』のイベントねじ込みたいんだけど」

「今、町会長に掛け合って話を進めてるんですが、イマイチ反応が悪くて…」

「いいわ。

『中出し生』100 ダース寄附してあげなさい。それでもダメなら私も行くから」

「は、はい！」

「山崎さん、午後から一緒にスカイツリーに行くわよ。言っておくけど遊びじゃないからね。

『東京タワービール』は、ポニービールに取られたけど、

『スカイツリービール』では絶対に取り返すわよ！

大吟醸ビール『中出し生』で勝負よ！」

「はい！ 東課長！」

~~~~~

【社内掲示板】

○『ベリー社長賞』訂正のお知らせ

2022 年度ベリー社長賞受賞者

商品名『大吟醸ビール中出し生』

開発者『東京子(あずま きょうこ)』

○人事課よりお知らせ

天神 四太郎 (あまがみ したろう)

営業二課課長 → 長野工場班長

東 京子 (あずまきょうこ)

営業二課役職無し → 営業二課課長

~~~~~

営業二課で一番若い京子が課長となり、物おじせずにビシバシと指示を飛ばしていた。課長という肩書きがそうさせるのか、元々の気質なのか業務をほぼ完璧にこなしていた。他の社員たちも年下に指示をされたからといって、不満を訴える者はいなかった。むしろ、上司と部下の信頼関係すら芽生え始めていた。

「皆んなー！ 今日に残業禁止だからねー！

終わったら焼肉『処女苑』に集合よ！

今夜はパーッと行くわよー！」

「よっしゃー！」

京子の掛け声で皆んなは気合い充分、一斉に営業に飛び出した...

.

チカチカと電球が消えかかった電飾看板。

伝道コケ師 BAR

【ラブスラム】

「ほら、見て。

すごく良い写真でしょう？」

金髪の角刈りに派手な化粧の有雄は、カウンターの上にスッと一枚の写真を差し出した。隣りに座る京子は、焼肉屋の帰りにも関わらず豪快に生ビールを飲み干すと、マスターにおかわりを注文した。

「ん？ 何の写真？」

カウンターテーブルに置かれた写真を手に取った。

そこに写っていたのは、瓦礫の街でトラックの荷台に乗り込む武装した男たちの姿だった。

よく見ると手榴弾を頬に寄せ、嬉しそうに隣りの男に抱きつく金髪で角刈り有雄がいた。抱きつかれている男は、マシンガンを空に向けて撃ち鳴らすマスターだった。黒光りしたスキンヘッドにイカつい体は、現地の戦闘員より戦闘員だった。

「え？ ええー！？」

京子が絶句していると、有雄は過去の甘く切ない恋愛話でもするように語り始めた。

「今でもあの時の温もりは忘れないわ。

マスターはね、

地雷に気付かず走り出した私を、後ろから強く抱きしめたの。

そのまま二人は地面に倒れ込んで、抱き合ったまま見つめ合った。

数秒のことだったけど、永遠に感じられたわ。

聞こえてくる銃声と爆撃音は、まるで私たちの恋を盛り上げる交響曲のようだったわ...」

マスターは聞いてないかのように、何かを磨いていた。

手榴弾だった。

いや、アボカドだった。

「本当にマスターは戦争に巻き込まれてたんですね！

ていうか、戦ってますよね？」

マスターは鼻で笑った。

「ちょっと、私の話を聞きなさいよ！」

「あ、はいはい。

で？ 何でアリチンと一緒に戦ってたの？」

「はい、良い質問よ京子。

それはね、

中東には開拓されてない、まだまだ未知の植物が生息しているの。

私は究極の麻婆豆腐が作りたくて
『新種の花椒』を探しに出掛けた。
そうしたら同じくマスターも
『新種のホップ』を探しに中東に来たのよ！
物は違うけれど、志は一緒。
私たちはすぐに意気投合したわ。
この出会いは、まさに運命！
その時初めて神様に感謝したわ。

ああ～、そこはダメ～」

有雄はまた自分の世界に入ってしまった。

「今ここで『さきっぽ生』が飲めるってことは『新種のホップ』は見つかったんですね？」

マスターはアボカドを磨くのをやめた。
代わりに何かを京子の前に差し出した。
それはホップよりも大きく、色味の強い植物の種子だった。

「これが『新種のホップ』…」

京子はまじまじと見つめた。
これを見つける為に命も顧みず中東に渡り、戦地をくぐり抜けてきたマスター。
すべてにおいて想像を超えていた。
自分が考えた大吟醸ビールなど敵うわけがないと思った。

「いや、それは『新種の松ぼっくり』だ」

マスターはそう言うと、
『新種の松ぼっくり』を取り返し、ハァ～と息を吹きかけながら磨き始めた。

京子は考えるのをやめた…

第5話『ポニービール』

「えー、本日は私のような者の為に、このような盛大な会を開いて頂き、誠にありがとうございます。ございます。

ポニービールに入社してから、営業一筋 40 年。大きな失態もなく、代わりに大きな功績もなく、無事にサラリーマン人生を勤め上げることが出来ました。これもひとえに、皆様のお支えがあったからだと思っています」

「よ！ ミスター営業！」

「ポニービールの名誉課長！」

【お疲れ様です！

平(たいら)課長！】

手書きの横断幕が掲げられている。

大衆居酒屋の座敷の片隅で、総勢 6 名による送別会が、慎ましやかに行われていた。

「ポニービール営業一課！

今までありがとう！

君たちの明るい未来に乾杯！」

平課長は目を潤ませ、グラスを高々と突き上げた。

「カンパーイ！」

ビールに口をつけると、部下たちはグラスを置き、すぐさま全力で拍手をした。

これでもかと拍手し続けた。

「他のお客様のご迷惑になるので、お静かにお願いします！」

店員がすっ飛んで来た。

ポニービール営業一課 入社3年目
手国 旬(てくに しゅん)

素早く店員のもとに駆け寄り対応した。

「すみません、すみません、すみません！
すぐ終わりますんで、本当すぐ終わりますんで！」

店員は、注意しましたよという顔で去って行った。手国は、それを見届けると、腰を屈めながら自分の席に戻った。

平課長の周りには、直属の部下たちが集まり、お酌合戦をしていた。

「ふう…」

手国は、泡の消えたグラスのビールを飲み干すと、一息ついた。

「さすがです、先輩」

ポニービール営業一課 新卒社員
有部 純子(うぶ じゅんこ)

隣りに座る純子は、手国の空いたグラスにお酌した。

「え？ 何が？」

「いつも対応が素早いな～と思って」

「そんな大したことないよ。
ただ、こんな席で平課長に恥はかかせられないだろ？」

「そういうところ、素敵です」

二人が揃って平課長を見た瞬間、横断幕は外れ、平課長の頭の上に垂れ落ちた。
慌てて部下が、横断幕を剥ぎ取った。

「すみません課長！
おい！ 誰だこれやったヤツー？」

横断幕を振り上げると、手国はスッと視線を逸らした。

「あれ？先輩？どうしました？」

「ごめん、ちょっとトイレ」

手国は逃げるように席を外した...

宴は平課長の思い出話から始まり、どこかで聞いたことのあるような営業理論を熱く語り、話しは趣味のジグソーパズルへと...

平課長は、普通を絵に描いたような人だった。

だが部下たちは、そんな平凡でつまらない話にも一切嫌な顔を見せず、必要以上に驚いて見せたり、ウンウンと大きく頷き、本気で感心していた。

そこには、長年に渡り築き上げた絶対の信頼関係があった。

終始、上機嫌な平課長だったが、

【はなむけ宴会 90 分コース】が終盤に差しかった頃、部下たちを集めて肩を叩き、涙を流しながら激励していた。

「これからはお前たちの時代だー！

がんばれよー、がんばれよー」

部下たちも一緒になって泣いた。

「すいませーん、ラストオーダーでーす」

平課長はすでに立てないくらい酔っていた。店員の声は、レフェリーストップのようだった。

事前に徴収していた会費で会計を済ませると、

【はなむけ宴会 90 分コース】は幕を下ろした。

両肩を部下に支えられながら、タクシー乗り場に向かう平課長。

2 次会に繰り出す雰囲気ではなかった。

飲み足りない人は各自でという形で解散となった。

当てもなく店の前で立ち尽くす、手国と純子だった。

「これで終わりなんだな、平課長とも」

「そうですね…」

手国は大きく息を吐き、感傷に浸るのをやめた。

「何か飲み足りないなー」

「はい」

「もう一軒行くか？」

「はい！

じゃあ、リクエストしてもいいですか？」

「お、おう。

いいけど、あんまり高いところはダメだぞ」

「私、BAR 行ってみたいです！」

「え？…BAR？」

.

ガヤガヤとした飲み屋街から外れた裏路地。

チカチカと電球が消えかかった電飾看板。

伝道コケ師 BAR

【ラブスラム】

手国と純子は夜の街を彷徨い、ここにたどり着いた。

「キャ〜怪しい〜」

純子の好奇心はディープなものを好むらしい。ここに来る途中にも、いくつも BAR はあった。

だが、どれもスタイリッシュで洗練された雰囲気のお店ばかりだった。純子はことごとく首を横に振り断った。

「本当に BAR 初めて？」

「はい、初めてです」

手国は膨らむ不安を抑え込み、恐る恐る扉を開けた。

間接照明だけの薄暗い店内。

霧がかったお香の煙が漂い、ウッドベースだけの BGM が流れる。

5 席ほどの狭いカウンターテーブルの向こう側に異質を放つ、イカつい体の男がいた。

黒光りしたスキンヘッドに、袖を切り落とした黒シャツから見える二の腕は、丸太のよう
に太かった。筋肉の張りを確認しながら何かを磨いていた。

ライフル銃？

いや、ハンディタイプの掃除機だった。

「あーしゃーせー」

マスターは、手国と純子を見ずに言った。

うわ〜帰りて〜

手国は、自分一人だったら「間違えました」と言って店を出ているところだった。

だが、逆にワクワクしている純子の手前、そんなことは出来なかった。

強気に出る。

「ハーイ、マスター！

いつものやつお願い！

なーんて、ここ初めてだった」

シンとする店内。

純子さえも笑っていなかった。

「オホン」と咳払いをひとつすると、手国はコソコソとカウンター席に座った。

続いて純子も隣りの席に座った。

マスターは二人をジッと見つめると、何やら作り始めた。カウンター越しからは何をし
ているのか分からなかった。

マスターは、一枚の皿に何かを乗せ、何も言わずに二人の前に差し出した。

「？」

見ると、ひっくり返った鏡餅だった。

「おもちかえり」

マスターがボソッと行った瞬間、手国は慌てた。

「ちょ、ちょっと、マスター！
僕たちそんなじゃないですから！」

「へえ～
BARのお通しってお餅なんだ」

至ってマイペースの純子だった。

「あ、美味しい！
先輩も食べてみて」

「え？ あ、食べていいの？
て、あれ？ そういう意味じゃなくて、その、
ああー！」

手国は頭を掻きむしり、一人でパニックになっていた。
このままでは、どちらがBAR初めてなのか分からなくなってしまう。
手国は深呼吸をすると、自分に出せる限りの低音ボイスで話した。

「実は僕たちポニービールの人間なんですよ。あの大手のね。
色々勉強させて貰ってるので、ビールにはちょっとうるさいんです。
試すと言ったら偉そうですが...
マスター、生ビール頂けますか？」

決まった。
これで、あとは味の評価をビシッとさえすれば、最初のドタバタ劇は帳消しに出来る。

「あ、私もBARの生ビールください」

純子は楽しそうに手を挙げた。

マスターは、無造作に冷蔵庫からジョッキを二つ取り出すと、流れるような動きで正確無比な7対3の割合でビールを注ぎ、二人の前に差し出した。

手国は哑然とした。

荒々しく見せて、実は一切無駄のない動きだった。

そして宝石のような琥珀色のビール。

このビールは、飲む前から『スゴイ』と感じられた。

ジョッキを手にとると、五感を研ぎ澄まし、ゆっくりとビールを喉に流した。

「な、何だ、このビール？」

手国は思わず口にした。

とてもじゃないが自分の持てる表現力では、このビールのスゴさを伝えることは出来ないと思った。

「口にした瞬間に弾ける麦芽のエネルギー。

押し寄せて絡み合う芳醇な香りとコク。

切ないまでに思わせるホップの儚いホロ苦さ。一口飲むたびに幸福感で満たされていく...

これはビールの最高傑作です！」

純子も衝撃を受けていた。

「そう！ それ！

僕が言いたかったのは、そういうこと！」

手国は恥ずかしげもなく叫んだ。

「マスター！

このビールは、一体どこのメーカーなんですか？」

やや前のめりに聞く手国に対し、マスターは平然と答えた。

「どこでもない、この店のビールだ」

「ええー！？

クラフトビール？

個人でこんなビール作っちゃうんですか？

いやいやいや、
マスター天才ですよ！」

手国の興奮は止まらない。

「是非、我がポニービールと提携しましょう！

個人店で埋もれてしまうには、大変惜しいビールです！ ポニービールの力を使って、全国に売り出しましょう！

このビールなら絶対に業界 No. 1 になれますよ！」

マスターは答えるかわりに、手国の前にカクテル用のグラスを差し出した。

「？」

二の腕の筋肉を確認しながらシェーカーを振り始めた。

自然と黙ってしまった手国。

マスターはシェーカーのキャップを開け、ゆっくりとグラスに注いだ。

その液体は無色透明だった。

さらにシェーカーを傾けると、緑色の小さな物体がグラスの中に落ちた。

カエルの形をしたオモチャだった。

「こ、これは何ですか？」

「『井の中の蛙大海を知らず』だ」

マスターが言うと、手国は急に顔を赤らめた。

「それってマスター！

僕が世間知らずの蛙だって言いたいんですか？」

「いや、そうじゃない。

蛙は淡水で生きる生物だ。

海では暮らせないってことだ」

手国は衝撃を受けた。

「す、すごい！
どういう意味かよく分からない！」

ハッとして、目の前のグラスを一気に煽った瞬間、吐き出した。

「しょっぺー！」

「そうだろう。
それは海水だからな」

ヒーヒー言いながら、口直ちにビールを飲む手国を見て、純子はこれが BAR なんだと、感動に目を潤ませていた...

第6話『ハゲタカ』

ポニービール本社

【営業一課】

「おい、聞いたか？」

次の課長、誰になるのか？」

「ああ、どうやら『ハゲタカ』らしい」

「マジかよ！

俺らヤベーじゃん！」

平課長直属の部下だった二人は、朝からコソコソと慌てていた。

「それでは朝礼を始めます。

皆さん集まって下さい」

ポニービール営業一課の朝が始まる。

日直が声を掛けると、課長のデスクの前に皆がダラダラと集合した。

「朝礼の前にまず、人事の方から報告があります。

先日、定年退職された平課長の後任者が決定致しました。

それでは新課長、ご挨拶をお願い致します」

課内の扉がバーンと開かれた。

その瞬間、営業一課の社員たちは硬直した。

威嚇するように歩き、ゆっくりと皆の前に立つ男。

鍛え上げた肉体にピッタリと張り付いたようなスーツ姿。ガチガチのオールバックに鋭い眼光。無数に付けられた顔の傷は、どう見てもサラリーマンには見えなかった。

「俺が、長谷 高雄 (はせ たかお) だ。

誰が言ったか知らねーが、

『ハゲタカ』なんて呼ぶヤツがいるらしい。

結構、結構、大いに結構！

俺は平のような、種を蒔き、苗を育て、共に収穫するなんて営業方針は持っちゃいない。

営業は農家じゃねー！

狩りだ！

営業はすべてを喰い尽くす狩りだ！

俺のやり方に着いて来れないヤツは、いつでもこの営業一課から出て行け！」

長谷課長は言い放つと、ツカツカと社員の列に入って行き、ピタッと足を止めた。

平課長直属の部下の二人の前だった。

「これから楽しみだな。

農具は捨てろ。

俺が狩りのやり方を教えてやる」

そう言って、長谷課長が二人の肩に手を置くと、目を合わせないように、二人は下を向いた。

.

「すいませ〜ん！

長谷課長、質問がありま〜す」

この張り詰めた緊張感の中、列のどこからか、とぼけた声が聞こえてきた。

生徒が先生に質問をするように、手を挙げてたのは手国だった。

「提携して、一緒に新しい商品を売り出したいと思った時、長谷課長ならどうしますか？」

長谷課長は声のする方へゆっくりと歩き、手国の顔を睨みつけた。

「提携だと？

お前も平の残党か？

俺ならそんなことしねーな。

綺麗事を並べても、腹が減りゃ結局奪い合いだ。

だったら先に奪っちまう。

奪えなかったら潰す！

それが生き残る為に最短で最高のやり方だ」

不敵な笑みを浮かべると、列の中から抜け出し、この後の朝礼も関係なく課内から出て行った。

.

「はあ～」

営業一課の社員たちは、息を止めていたかのように一斉に息を吐いた...

.

ランチタイムの戦場を終えた、チェーン店の牛丼屋。

手国と純子は、昼過ぎまで挨拶回りの営業をこなした後、遅めの昼食と休息をここで済ませることにした。

カウンターテーブルに注文した食事が届いても、ボーっとする二人だった。

「やっぱり、先輩スゴイです」

「ん？ 何が？」

「皆んなが、長谷課長のことを怖がっているのに、あんな質問できるなんて...」

「あー、

あれはただ平課長がバカにされたと思ったら、なんか悔しくて」

「そうじゃない、手国先輩よりもっと平課長に近かった先輩たちは、何も言い返せなかった！」

「それが普通だよ。

でも、僕はバカだから思ったことを口にしちゃうんだ」

「私決めました」

「え？ 何を？」

「私、手国先輩についていきます！

何があってもついていきます！」

「え？ ええー？

急に何言ってんだよ有部～～」

手国は嬉しさと恥ずかしさで、激しく動揺した。

目の前にある味噌汁をかき混ぜると、牛丼にかけた。

「あ！ 間違えた！」

その様子を冷静に見守る純子だった。

「先輩、卵は？」

「あ！ ああ～、

もうどうにもなんね～」

かき混ぜて牛丼にかけるはずだった生卵。

この何気ないミスが、カオスの始まりだった...

.

チカチカと電球が消えかかった電飾看板。

伝道コケ師 BAR

【ラブスラム】

「ねえ、あんた最近来すぎじゃな～い？」

ベルモットを飲みながら気だるそうに言う有雄は、金髪の角刈りからモヒカンにモデルチェンジし、化粧もさらに派手さを増していた。

「そういうアリチンだって。

いつもいるじゃない」

有雄とは距離を置いたカウンター席から、京子は言い返した。

「何言ってくれちゃってんのー！

わたしはねー

あんたみたいなハエがマスターに集らないように見張ってんのよ！」

「ひっどーい！

人のことをハエ呼ばわりするなんて！

モスラに言われたくないんですけど！」

「あらら... 何この子？

どんどん強くなってる。

若くして課長になんかなったもんだから、心臓に毛が生えちゃったのかしら？

ねえ、マスター抜いてあげて！

京子の心臓の毛、全部抜いてあげて！」

マスターは大きく頷くと、有雄の前に何かを置いた。

毛抜きだった。

「あらやだ、本当に抜くつもり？」

「鏡見てこい、鼻毛出てるぞ」

「ウソ？

やっだー恥ずかしいー！

マスターちょっと借りるわね」

有雄は毛抜きを手にとると、そそくさとトイレに駆け込んだ。

京子は、ひとしきり笑うと生ビールをおかわりした。

マスターは流れるような動きで、ジョッキを取り出し、完璧なまでの7対3の割合でビールを注ぐ。

差し出す時、上腕三頭筋から前腕にかけて浮き出た血管を見せつけた。

京子は見えていなかった。

見ていたのは、宝石のような琥珀色のビールの方だった。

ジョッキにそっと触れ、優しく唇に運ぶ。

ゆっくりと傾け、すべてを感じ取るようにビールを喉に滑らせた。

「やっぱりスゴイ...」

今や業界売り上げ No. 1 となった、

大吟醸ビール『中出し生』

それを開発した京子でさえ、マスターの

『さきっぽ生』には遠く及ばないと改めて思った。

「実は、マスターが夕陽ビールに残してくれた『さきっぽ生』の製造レシピ。
それを元に醸造部に協力してもらい、
『新種の松ぼっくり』でビールを作ってみました。」

ダメでした。
ビールにすらならなかったです」

マスターは珍しく微笑んだ。

「中東まで行って命がけで見つけた『新種の松ぼっくり』
私にはとても扱える代物じゃなかった。
どうすれば、こんな美味しいビールに変えられるのか...」

「理想は遠くにあると思いがちだ。
だが、案外近くにあったりするもんだ」

マスターはそう言って、背を向けた。
壁に手摺りのように掛けてある木製のバットを掴むと、力を込めて横にスライドさせた。

すると、壁も一緒に動いた。

スライドした壁の奥から現れたのは、錆びついた鉄扉だった。

「え？ え？」

戸惑う京子に構うことなく、マスターは鉄扉を押し開けた。
その先は薄暗く、地下へと続く階段が見えた。

「知りたいんだろ？
『さきっぽ生』のすべてを。
だったらついて来な」

マスターは慣れた様子で階段を降りて行った。京子は慌ててカウンターを潜り抜け、マスターの後について行った...

誰もいなくなった店内。

トイレから有雄が帰って来た。

「いや〜ん、マスターありがと〜
茎ワカメみたいなスッゴイのが抜けたわ〜
て、誰もいないじゃなーい！」

.

マスターは階段を降り切ると、地下室の扉を開けた。
眩い光が飛び込んで来た。
京子も一緒に地下室に入ると、煌びやかな大きなタンクが待ち構えていた。

「ビール工房？」

京子は立ち尽くした。

10 畳ほどの狭い地下室で、器具類が効率よく配置されている。器具類はすべて綺麗に磨かれ、温度も一定に保たれている。
地下室とは思えない清潔な空間は、丁寧なビール作りをしていると感じられた。

「松ぼっくりは新種だろうが何だろうが、どうやってもビールにはならない」

「え？」

「無駄なものを削ぎ落として手に入れる最高に無駄なもの。
そういうことだ」

「す、すごい。
どういうことかさっぱり分からない！」

「あんたならここへ行けばわかるだろう」

マスターは京子に何かを手渡した。

一枚の名刺だった。

—————

天ぷらそば専門店

【麦山汁源】

住所 山形県 XXXX XXX XXXX

天ぷらそば～？
しかも山形～？

京子が顔を上げると、マスターは大きく頷いた。

京子も頷いたが、何にも分かっていなかった…

.

澄みきった青空のもとに広がる、緑鮮やかな山々。
ふもとまで続く、のどかな田園風景。

京子は週末の休みを利用して、名刺の住所を頼りに山形県の奥地まで来ていた。
自然豊かな風景を見ながら、小川のせせらぎを聞き、新鮮な空気をたっぷりと吸いながら歩いていると、疲れなど感じなかった。

そろそろ目的地に近づいてることを、スマホの地図で確認する。
顔を上げると、小川の先に水車小屋が見えた。
茅葺き屋根の素朴な造りは、昔話に出てきそうな風情があった。
橋を渡り、小屋の正面に立つと、一枚板の看板が立て掛けてあった。

天ぷらそば専門店
【麦山汁源】

ここだ。

京子は入口の格子戸を、そろそろと横に引いて中に入った。

「ごめんくださ～い」

四人掛けのテーブル席が、二つだけの小さな店内。

誰もいなかった。

店内を見渡すと、奥に水車を原動力にして石臼を回し、そば粉を挽く装置があった。

「うわ～すごーい！」

京子はワクワクして、近くで見ようと歩き出した瞬間だった。
何かを踏みつけた。

「あふ！」

京子はビックリして後退りした。

床を見ると、作務衣姿の老人が股間を押さえながら、よろよろと立ち上がってきた。
ボサボサに伸びた白髪頭に白いヒゲ。
額の深いシワに赤い鼻。
仙人のような、お爺さんだった。

「最近の若い娘は大胆じゃの～」

「す、すみません！」

床と同じ色のだったので気付かなかったです。大丈夫ですか？」

そう言って股間に手を伸ばしかけたが、ふと我に振り返り止めた。

「ん？ どうしたんじゃ？
早くさすっておくれよ～
腫れてしもうた～」

京子は急に冷めた目で、お爺さんを見た。

「フォッフオッフオッフ、冗談じゃよ。
暇な爺ィのたわむれじゃ。
ほれ、そこに座んなさい」

お爺さんはテーブル席を指差し、自分は何かを取りに調理場に入っていった。
京子は言われるがまま、テーブル席の椅子に座った。

お爺さんは戻って来ると、テーブルに一升瓶と二つの湯呑み茶碗を置いた。

「山形の地酒じゃ。
飲むか？」

「はい、頂きます」

酒の誘いは断らない京子だった。

酒飲みで営業職の京子。こういう場面では、力を発揮する。初対面の相手でも、すぐに打ち解けてしまった。

二人は酒を酌み交わし、他愛もない世間話で盛り上がった。

「いや～、若いのにイケる口じゃの～」

「はい、日頃から鍛えてますから！」

「フォッフッフッフ、そりゃ頼もしい。

ところで、お前さんは何をしに来たんじゃ？」

「ん？ そういえば...

何だっけ？」

「ん～？

若い娘が喜びそうなものなんて...

うちには天ぷらそばしかないからの～」

「あ、そうです！

天ぷらそばを一つください」

「おお、そうか。

じゃが、少々飲んだら気前良くなってしまうぞい？」

「はい、大丈夫です。

ダイナミックにやって下さい」

京子が言うと、お爺さんは機嫌良く調理場に入って行った。

シャーッという、天ぷらを揚げる良い音が聞こえてくる。

氷水で蕎麦を締める音。

段取りよく調理されていくのが、音だけでわかった。

「ほれ、おまたせ。

特製天ざるそばじゃ」

お爺さんは、お盆に乗せた天ざるそばを京子の前に差し出した。

「うわ～」

思わず声が出るほど、綺麗に盛られていた。
一つ一つの素材が生き生きとして、美味しさのオーラで溢れていた。

「いただきます」

京子はまず、蕎麦から箸をつける。
麵つゆにくぐらせ、一気にすすった。
蕎麦の良い香りが鼻から抜け、ツルッとした喉越しが心地いい。
間違いなく一級品の蕎麦だった。
とてもスケベ爺ィが作ったとは思えないくらい素晴らしかった。
次に天ぶらに箸を伸ばす。

季節はずれの、ふきのとう？

添えてある山椒塩につけてから口に運び、ゆっくりと噛みしめた。
目を閉じ、口の中に広がる素材の風味を味わった。

京子はパッと目を見開いた。

「ホップ？」

京子が信じられないという顔を見ると、お爺さんも信じられないという顔をした。

「お前さん、わかるのかい？」
いやー、若いのに大したもんじゃー！
この天ぶらがホップだと気付いたのは、お前さんと、あともう一人だけじゃぞ」

「え？」
もう一人ってまさか...
マスター？
いえ、升田 餅子男さん？」

「おおー何じゃ、餅子男の知り合いかー？」

お爺さんはそれを知ると、京子にお酌をした。自分の湯呑みにも酒を注ぐと、勝手に乾杯の仕草をして一気に飲み干した。

「餅子男はのう、このホップの天ぷらを食った瞬間に、どこで手に入れたホップなのかを聞いて来た。

これはワシが育てたホップだと言ったら、いきなり『先生』と言われたんじゃ。最初は何のことか解らず、慌てたわい」

京子は何となく想像すると、クスクスと笑った。

「要するにワシが育てたホップでビールが作りたいということじゃった。ホップの天ぷらの味だけで、自分の作りたいビールを頭の中で完成させたんじゃ。凄い男が現れたとワシは驚いたわい」

「あの一、
ひとつ質問なんですが、どうしてホップを天ぷらにして出してるんですか？」

「ああ、それはのう。
このホップは、ワシが30年掛けて改良に改良を重ねてやっと完成させたんじゃ。最初は色んなビール会社にも売り込みに行ったわい。
じゃが、どこもワシが作ったホップは、香りも苦味も強すぎると言われて断られたんじゃ。
おまけにワシ一人で育ててる収穫量では少な過ぎる、商品にならんとも言われた...
ワシは途方に暮れてしもうた」

京子は聞きながら、お爺さんにお酌をして、自分の湯呑みにも注いだ。
二人とも湯呑みをクイッとやった。

「ようやく完成したと思ったワシのホップ。
辞めてしまったら30年が無駄になってしまう。何とかならんかと、思いついたのが天ぷらじゃった。
試しにやってみたら案外旨くてのう。
天ぷらだけじゃ寂しいと思って、蕎麦も打ち始めたんじゃ。
そうしたら、あれよあれよと言ってる間に、この店が出来たんじゃ」

「すごいです！
形を変えても自分のホップを貫いた。
お爺さんの強い思いを感じます」

「強い思いがあったのはワシだけじゃない。
餅子男も同じじゃ。
中東まで行って死ぬ思いをしても探し求めたホップは見つけられなかった。

だが、やつも諦めんかった。

餅子男とワシは表裏一体なんじゃ。

餅子男の製造方法は、ワシのホップでなければ完成せん。

ワシのホップも、餅子男の製造方法でなければ完成せん。

『さきっぽ生』はワシらが出会ってなかったら生まれてなかった奇跡のビールなんじゃ」

話し終えると、お爺さんは席を立ち上がり店を出た。

すると、格子戸の外から手招きをしていた。

「あ、はい」

京子も店を出た。

何も言わずスタスタと歩き出したお爺さんは、店の裏の森に入ってしまった。

京子も慌てて、その背中を追いかけた。

けもの道のような道なき道を歩いていく。

しばらくすると、視界の先に陽の光りが見えた。

導かれるように歩いていくと森を抜け、前が開けた。

そこで見た景色は、太陽の光りをたっぷりと浴びて、生き生きとした黄緑色が映え渡るホップ畑だった。

3メートル以上にもなるホップの木が何列にも連なる光景は、圧倒される美しさだった。

「き、綺麗…」

京子はその場に立ち尽くした。

お爺さんは、畑の隅から八尺もある脚立を持って来た。

「登って見るか？」

もっと綺麗じゃぞ」

「はい！」

京子は大きな脚立を前に、アトラクションのようなワクワクを感じた。

しっかりと脚立に手を掛けると、

一段一段ゆっくり登っていった。

すると、一段一段お爺さんも一緒に登ってきた。

「え？」

京子は踏み止まった。

お爺さんは踏み止まらなかった。

どんどん登って来る、お爺さんは京子の尻に顔を押し当てた。

京子は反射的に馬蹴りで蹴飛ばした。

ドサッ！

鈍い音と共に、お爺さんは仰向けのまま畑に落ちた。

だが、倒れているお爺さんの顔はどこかやり切った感のある笑顔を浮かべていた。

「お爺さん？」

お爺ィ～さぁ～～～ん」

京子の叫び声は、ホップ畑に虚しく響いていた...

第7話『しる爺』

チカチカと電球が消えかかった電飾看板。

伝道コケ師 BAR

【ラブスラム】

「プハ～～！」

京子はカウンター席で、豪快に生ビールを飲み干した。

その向かい側で、マスターは腕の筋肉の動きを確認しながらタンバリンを入念に磨いていた。

他に客はいなかった。

京子が、おかわりと言わずとも流れるようなベストなタイミングで、生ビールを差し出すマスターは、上腕三頭筋が美しく見えるように捻りを加えていた。

「汁先生は、何か言っていたか？」

「しるせんせい？」

京子が聞き返すと、マスターは当然のように言った。

「麦山汁源 (むぎやましるげん)

先生の名前だろ」

「え？」

あの店名は、お爺さんの名前だったんですね」

しる爺...

京子は心の中で呟いた。

「お元気でしたよ、あっちの方も。

私がホップの天ぶらに気付いたら驚いてました。

その後、貴重な話も聞かせてもらいました。

『さきっぽ生』誕生秘話ってやつですね。

しる爺とマスターの関係にも感動しました！」

しる爺と言った所で、ピクッと反応したがマスターは流した。

「あんたなら、あの天ぶらに気付くと思った。

ホップ畑は見たか？」

「はい、見せてもらいました。

太陽の光をいっぱいに浴びるホップ畑は、とっても綺麗でした...

でも何でマスターは、私に色々と教えてくれるんですか？」

京子の問いに、マスターは意を決したようだった。

「あんたに、一つ頼みたいことがある」

「それなら私も、一つお願いがあります」

京子は真剣な目で言った。

「あんたって呼ぶの、やめてもらっていいですか？

京子って呼んでください」

マスターのタンバリンを持つ手が緊張した。

シャシャン！

一瞬固まったが、冷静を装いマスターは声を絞り出した。

「きょ、きょ、きょう...」

京子は固唾を飲んで見守った。

「強行突破しようとする、今日この日を無駄にしよう。
強固な気持ちを持って、今日行動すれば…」

「フフ、何ですかそれ？」

マスターは遠くを見てしまった。

「私の願いはもういいです。
マスターの頼み事って何ですか？」

シャシャン！

マスターは、タンバリンを揺らした…

.

夕陽ビール本社最上階
【社長室】

重厚な作りのデスクの上で、昔懐かしい野球盤ボードゲームを秘書と一緒に、佐原社長はキャッキヤ言いながら遊んでいた。

コンコン！

社長室をノックする音が聞こえた。

「失礼します」

一面に装飾が施された荘厳な社長室の扉が、ゆっくりと開かれた。

扉の向こうから現れたのは、京子だった。

その姿は蛍光色強めのポロシャツにミニスカート、頭にはサンバイザー。背負うリュックの中にはビールサーバー。
どう見ても、野球場にいるビールの売り子だった。

「ハッハッハッ
実に君はタイミングがいい。
野球には生ビール！

わかっとなるねー」

佐原社長はご機嫌だった。

だが、京子は真剣な顔を崩さない。

ツカツカと社長のデスクの前に立った。

何やら始まりそうな雰囲気、秘書はササッと、その場から後退りして消えた。

「佐原社長に飲んで頂きたいビールを持って参りました。

是非、ご賞味ください」

京子はそう言うと、コースターを社長の目の前に置いた。

透明のプラスチックのコップを取り出し、そこへ背中中のタンクから伸びたホースのガンを使って生ビールを注いでいく。

練習の成果が表れ、キレイな7対3になっていた。

慎重にコースターの上に置いた。

「ほう…」

社長は宝石のような琥珀色のビールに、まず目を奪われた。

自然と手を伸ばし、コップをゆっくりと口元に運んだ。目を閉じ、少し香りを楽しむと、ビールを口に含んだ。

社長は目を見開いた。

その後は本能が欲するままにビールを一気に流し込んだ。

『千のビールを知る男』と業界で恐れられている佐原社長が、空のプラスチックのコップを持ったまま、放心状態になってしまった。

「これが『新種のホップ』を使った

本物の『さきっぽ生』です」

京子の声で社長は我に返ると、本革の椅子から身を起こし、しっかりと構え直した。

京子は気を引き締めた。

「幻となって消えた『さきっぽ生』は、5年の時を経て、本当の開発者である、

升田 餅子男さんがついに完成させました。

当時、中東での『新種のホップ』探しは、内戦に巻き込まれ、行方不明となり失敗に終

わりました。

ところが升田さんは諦めず日本に帰国し、夕陽ビールを去った後でも『新種のホップ』を探し続けました。

そしてついに見つけたのです。

山形県の奥地で。

その『新種のホップ』を育てていたのが、

麦山汁源さんという一人のご老人でした。

ところが 30 年掛けて改良に改良を重ねて育て上げた

『新種のホップ』は苦味と香りが強すぎると、一般のビールメーカーでは受け入れて貰えませんでした。

麦山さんもまた自分のホップでビールを作ってくれる人を探していたのです。

そこへ現れたのが、升田さんの製造方法でした。

ホップの先端だけを使い、新芽の生命力を旨味に変える製造方法は、麦山さんが育てた

『新種のホップ』を使うことによって何倍にも旨味が増したのです。

まさに運命の出会いでした。

自分を諦めなかった、二人の男の情熱が作り上げた奇跡のビール。

それがこの『さきっぽ生』なのです」

京子の話を黙って聞いていた佐原社長は、空になったコップを目の前に突き出した。

「おかわり」

京子はハッとなり、お辞儀をしてコップを受け取ると、手元のガンからビールを注いだ。

きっちりと 7 対 3 の割合でコースターの上に置いた。

社長は満足そうに一口飲むと、続けてと言うように手のひらを京子に向けた。

「はい。

この『さきっぽ生』の凄さは、飲んで頂くのが一番だと思い、このような形を取らせて頂きました。

そして、このビールを知った上でご相談があります。

『さきっぽ生』を夕陽ビールで商品化させて頂けないでしょうか？

これは、升田 餅子男さんからの申し入れです」

ビールを飲む社長の手が止まった。

「う〜ん」と唸ってから口を開いた。

「なぜ今になって、夕陽ビールで商品化させたいんだ？
ここまで素晴らしいビールを完成させたのは升田くん本人だろ？
夕陽ビールとしては、何の手も貸していない。
自分たちのブランドとして売り出した方が儲かるだろうに」

「升田さんに儲けという考えはありません。
升田さんの思いは、師と仰ぐ麦山さんのホップ畑を守ることなんです。
麦山さんは、ご高齢でしかも一人でホップの栽培をしている為、生産量が少ない上に後継者もいません。
『新種のホップ』は、いつ消えてもおかしくない状態にあります。
この問題は、一個人では解決出来るものではありません。
そこで升田さんが頼みの綱と考えたのは、大手ビールメーカー夕陽ビールの完全バックアップです。
麦山さんには『新種のホップ』の栽培を指導してもらい、ホップ畑の拡大は全国にある夕陽ビールの専属農家で引き受けます。
醸造所も長野工場をはじめとする、全国で増設可能です。
この計画は升田さん個人の要望ですが、
実際に『さきっぽ生』が夕陽ビールのブランドとして全国販売出来れば、夕陽ビールはさらなる飛躍を遂げると、私は確信しています。」

佐原社長は『さきっぽ生』をご賞味されて、どのように思われましたか？」

京子は姿勢を正した。

社長はプラスチックのコップに注がれた残りのビールを一気に飲み干すと、空のコップを京子の前に突き出した。

「これが答えだ」

京子は込み上がる感情を抑え、深々とお辞儀をした...

.

ポニービール本社
【営業一課】

「飛田ー！ 角田ー！」

ガチガチのオールバックに鋭い眼光。無数に刻まれた顔の傷。鍛え上げた肉体に貼り付けたようなワイシャツ姿にサスペンダー。

課内の中央のデスクで、ドンとふんぞり返り、長谷課長は大声で二人を呼びつけた。

平課長派だった二人は今や、長谷課長の通称『ハゲタカ』の言いなりだった。

「はい！」と瞬時に返事をする、軍隊のような素早さと綺麗な整列で、ハゲタカの前に立った。

「お前ら今何やってた？」

飛田から」

「はい！」

自分は今、領収書の整理です！」

「次、角田！」

「はい！」

自分は、交通費の計算です！」

「チッ、朝からやることか？」

営業一課は会社の特攻隊だろーが！

そんなことやってねーで、とっとと営業行ってこい！」

「はい！」

「あ、ちょっと待て。

その前に、俺の肩揉め。

右、飛田。左、角田」

「はい！」

二人は犬のように従順だった。

ハゲタカの両側に回り、丁寧に肩を揉み始めた。

満足そうに不敵な笑みを浮かべるハゲタカ。

「よし、いいぞ。

行って来い」

「はい！」

二人は素早く自分のデスクに戻り、手短に身支度を済ませると背広を羽織り、営業一課を後にした。

それを見ていた手国は、さり気なく自分もタイミングを合わせて課内を出た。エレベーターに乗り込む二人に追いつくと、手国もスッと一緒に乗り込んだ。

「どうしちゃったんですか、先輩たち！」

「うわ！ なんだ、手国か」

驚いた飛田が言った。

エレベーター内には三人しかいなかった。

飛田と角田は、少しホッとした表情を見せた。

「ハゲタカの言いなりじゃないですか！

何とかやり返しましょうよ！」

「やめとけ手国」

角田が言った。

「あの人の恐ろしさをお前は知らない」

飛田が言った。

「確かに怖いですけど、肩揉みなんかする必要ないですよ！」

「網走支社って知ってるか？」

角田が言った。

「え？」

網走支社とは、北海道にあるポニービールの最北端支社だった。

何もない枯れた土地に、ポツンとそびえ立つ廃墟のようなビル。

通勤では通えない為、ビル内に寮が設けられている。

そこで日々行われる業務は、会社の利益とは関係ない社会貢献的な作業だった。

網走支社はリストラさせたい人間だったり、社内で不祥事を犯してしまった人間たちを送り込む、まさに刑務所だった。

「聞いたことありますけど、うちらには関係ないですよね？」

「ハゲタカは、
新卒で網走支社に飛ばされている」

飛田が言った。

「え!？」

「そして、すぐに頭角を現した。
どうやったかは知らないが、荒くれてる奴らを一つにまとめると、網走支社初の利益を
生み出したんだ。
さらに初の支社長の椅子を作り、そこに君臨し、利益を上げ続けた。
その功績が認められ、本社までやって来たのが今のハゲタカだ。」

歩んできた道が全然違う！
そんな人に逆らって何が出来る？
勉強しかしてこなかった俺たちが、どうやって戦う？
ヘタに逆らって、網走支社になんか飛ばされたら、何もかも終わりだ！」

角田が言った。

「ハゲタカに睨まれたら、従うしかないんだ」

飛田が言った。

「手国、お前が可愛がってる後輩、有部だっけ？
気をつけろよ」

角田が言った。

「え？」

「弱点を見せたら終わりだ。
ハゲタカは、確実にそこを狙ってくる」

飛田が言った。

手国は返す言葉が見当たらなかった。

「平課長の時代は終わったんだ」

二人は口を揃えて言った。

エレベーターは1階に着いた。

二人は手国を振り返ることなく出て行った。

従うことを決めた飛田と角田の背中小さく、そして切なかった。

手国はやり切れない思いで二人を見送ると、エレベーターの扉は閉じた...

.

ポニービール本社

【社員食堂】

ミックスフライ定食をテーブルに置いたまま、手国はボーッとしていた。

向かいの席で、山菜そばを食べていた純子は顔に手をかざした。

が、全く反応を示さない手国だった。

「あ！先輩のエビフライ曲がってますよ！

私が直してあげます！」

そう言って手国のエビフライを箸で取り上げると、パクッと一口食べてしまった。

「はい、直りました」

純子がエビフライを戻すと、手国はようやく我に返った。

「あ！何勝手に食ってんだよー！

しかもエビフライ！」

「ボーッとしてる先輩がいけないんですよ」

手国はフッと笑い、ようやく箸を持って定食に手をつけた。

「お前ら仲がいいな。

付き合ってるのか？」

突然、二人の間に顔が出てきた。

「ハ、ハゲ、いや、長谷課長！」

手国は驚きの声を上げた。

ハゲタカはニヤけた顔で椅子だけを持って、二人の横に座った。

「そんな風に見えますか？」

純子は無邪気に聞き返した。

「やめろって有部！

何ですか？

用件だけお願いします」

手国は慌ててハゲタカと向き合った。

「何焦ってんだ？ お前、

余計怪しく見えるぞ。

フン、まあいい。

それより、いつか偉そうに言ってたよな？

提携がどうのって話。

あれはどうなってる？」

手国は箸を置いた。

「それはまだ、計画段階と言いますか、交渉段階と言いますか…」

「誤魔化すんじゃねー！

一から説明しろ！」

ハゲタカは急に怒鳴り声を上げた。

「うわ、はい！

こ、この前、たまたま BAR に行ったんです。

そこで試しに飲んだ生ビールが、本当に美味しくて感動したんです。

正直言って今、世に出ているどのビールよりも美味しいと思いました。

そのマスターに、どこのビールメーカーなのかを聞いたら、個人で作ってるって言う

んで、さらにビックリしました。
これは絶対に売れると確信しました。
是非、ポニービールで商品化したいと言ったんです」

「で？」

「なんですが...
マスターが変わってると言うか、掴みどころないと言うか、上手くあしらわれてしまう
んです」

「おもしれー話だな。
よし！
今夜そこへ案内しろ。

俺のやり方を見せてやる」

「え？」

手国は固まった。

「それ、私も行きたいです！」

純子は無邪気に手を挙げた。

「ほほう、
どうするよ？ 先輩」

ハゲタカはニヤけると、試すように手国を覗き込んだ。

「いや、有部は来なくていい」

手国は下を向いて言った。

「ハッハッハー
大事にされてるじゃねーか！」

ハゲタカは立ち上がると、純子の肩をボンと叩き、社員食堂を去って行った。

「？」

ポカンとする純子。

手国は夜になるのが恐ろしくなった...

第8話『宮崎県産マンゴー』

チカチカと電球が消えかかった電飾看板。

伝道コケ師 BAR

【ラブスラム】

「おいおい、本当かよ？

こんな所に世界一のビールなんてあんのか？」

ハゲタカは、舌打ちしながら店の外観を見回した。

「はい、大丈夫です。

飲んで頂ければわかると思います」

手国は扉を開けると、ハゲタカを先に通した。

間接照明だけの薄暗い店内。

霧がかかったお香の煙が漂い、ウッドベースだけの BGM が流れる。

5 席ほどの狭いカウンターテーブルの向こう側に異質を放つ、イカつい体の男。

黒光りしたスキンヘッドに、両腕の袖を切り落とした黒シャツ。

盛り上がる二の腕の筋肉を確認しながら何かを磨いていた。

ボーリングのピンだった。

「あーしゃーせー」

マスターは二人を見ずに言った。

「こんな感じの店です」

手国は、中央のカウンター席にハゲタカを座らせると、自分も横の席に座った。

「素晴らしい！

飲む前から旨いのがわかる！」

ハゲタカは、威嚇するようにカウンターテーブルを両手でバンッと叩いた。

「今あんたが叩いたのはテーブルだと思うか？

だとしたら大外れだ。

一枚板のサクラちゃんは純真無垢。

あんたはサクラちゃんを-spankingした」

マスターが言うと、ハゲタカは手国を見た。

「どういう意味だ？」

「わかんないっす」

手国は下を向いた。

マスターは磨き上げたポーリングのピンをハゲタカの前に置いた。

「もしこのピンがロケット弾だったら、あんたならどうする？」

試されるハゲタカだったが、余裕な表情で答えた。

「擦って発射させてやろうか？

ハッハッハッー」

「ハハ、残念。

ガーターだ。

『座薬にして憧れのあの娘の便秘を爆破してあげる』

これがストライクだ」

マスターが言うと、ハゲタカは手国を見た。

「どういう意味だ？」

「わかんないっす」

手国は下を向いた。

「なかなかエッジの効いた店だな。

気に入った！

それじゃあ、早速お目当ての生ビールを二つもらおうか、マスター」

ハゲタカは、マスターのペースにならないように切り替えた。

マスターはジョッキを二つ取り出した。

サーバーから生ビールを完璧なまでの7対3に注ぐと、歯を食いしばりモストマスキュラーのポージングで、二人の前に差し出した。

「美しい…」

マスターのポージングではなく、宝石のような琥珀色をしたビールを見てハゲタカは言った。

導かれるようにジョッキに手を伸ばし、ゆっくりと口元に運んだ。

一口飲むと何も考えられなくなった。

体が欲するままに一気に飲み干した。

弾ける爽快感と味わったことのない幸福感で、ハゲタカは放心状態になった。

ハッと我に返ると、声を張り上げた。

「素晴らしい！

このビール買った！」

ハゲタカは持って来ていたアタッシュケースを開けると、帯でくくられた一万円札の束をカウンターに、バンと出した。

積み重ねた束は5束。

500万円だった。

「これは手付金だ。

うちのポニービールから商品化出来たら、報酬はさらに倍出そう。全部で1500万だ！

どうだい？ マスター。

悪い話じゃないだろう？」

マスターは札束をひとつ掴むと、フンッと鼻で笑った。

「こんな油臭い紙、燻製のチップにもならない。

それでもお望みなら作ってやろうか？

この札束を燃やして作る燻製チーズ。
一品 500 万円だ」

マスターとハゲタカのための空気が張り詰めた。

その空気に割って入る声が出た。

「ごめんなさい。
ポニービールさん」

カウンター席の奥で、身を潜めて飲んでいた京子だった。

ハゲタカは瞬時に京子を見た。

「あ？
お嬢ちゃんが何の用だ？」

京子はすぐさま名刺を取り出すと、
「こういう者です」と言ってハゲタカの前に差し出した。

「夕陽ビール営業二課課長？」

こんな小娘が課長だと？ と言わんばかりに、ハゲタカは京子を睨みつけた。

「ポニービールさんが気に入られた、ここの生ビールですが、残念ながらうちの夕陽ビールから商品化が決定しているんです」

「なんだと？」

ハゲタカは手国を睨みつけた。

「え？ すいません！
知らなかったです！」

ハゲタカはカウンターに出した札束を全部アタッシュケースに戻した。
一枚だけ抜き取り、バンッとカウンターに叩きつけた。

「邪魔したな。
来い！ 手国」

ハゲタカは怒りを押し殺し、BAR を出た。
手国も後を追った。

店を出た途端にハゲタカは振り返り、手国の胸ぐらを掴んで、電柱に押し当てた。

「てめー！ よくも俺に恥をかかせてくれたな！」

「すいません！ すいません！
まさか夕陽ビールが絡んでるなんて…」

手国は押さえつけられながら、泣きそうな声を出した。
ハゲタカがパッと手を離すと、手国は地面にへたり込んだ。
見下ろすハゲタカは、京子の名刺を差し出した。

「いいか、てめーはこの女を徹底的に調べろ。あのビールについてもだ。
とにかくありったけの情報を集めて来い」

「そんな、今さら無理ですよ…」

ハゲタカは手国の横っ面を殴り倒した。
さらに髪の毛を掴み、無理やり顔を引き起こした。

「奪えなかったら潰すんだよ！
てめーがやらねーなら有部にやらせるぞ」

ハゲタカは手を離した。
地面に這う手国は必死で起き上がった。

「有部はまだ何も出来ない新卒です…」

「あ？ じゃあどうすんだ？
てめーがやんのか？ 有部がやんのか？
どっちなんだよ！」

「僕がやります…」

手国はハゲタカから名刺を受け取ると、またその場にへたり込んだ…

.

—————
氏名 東 京子 (あずま きょうこ)

年齢 24 歳

役職 夕陽ビール営業二課課長
—————

「はあ…」

手国は会社で、自分のパソコンに入力した画面を見て溜息をついた。

自分より一コ下なのに課長。

それよりも、京子に関しての情報がこれ以上集まらなかった。

さまざまな SNS から東 京子の名前で検索しても、何も出て来なかった。

「直接会うしかないのか…」

手国は、京子の名刺を手にとって、また溜息をついた…

.

♪

テレットテレット テ テットテットテット テテテテテテテットテ

得意先との商談も終わり、会社に帰る途中の京子。交差点で信号待ちをしていると携帯が鳴った。

「？」

知らない番号だった。

京子は、ためらわず電話に出た。

「はい、東です。

ええ、大丈夫です。

ん？

あ、なんだ天神さんか！

知らない番号だから誰かと思った。

携帯なくした？

フッ、相変わらずドジですね。
長野工場の調子はどうですか？
ふ〜ん、順調そうで何よりです。
あ、そうだ！
近々そちにマスター。
いえ、升田さんが『さきっぽ生』の監修役で行くからよろしく。
え？
殺される？
アハハー、それはしょうがないですね。
えー？
そんなに怖いなら、会った瞬間に土下座でもして下さい！
うん、はい、失礼しまーす」

電話を切ると、信号は青になった。
京子は歩き出した。

その後ろをピッタリと貼りつくように歩き出す男。

手国だった。

「あ、ちょっと、お姉さん！」

横断歩道を渡り切ったところで、手国は後ろから声をかけた。
反射的に京子は振り返った。
同時に手国は何かを差し出した。

箱に入ったマンゴーだった。

「落としましたよ」

「え？
それ私のないじゃないですけど…」

「そうですか、じゃあ差し上げます。
宮崎県産の完熟マンゴーです」

「はあ！？ 気持ち悪い！
ナンパのつもりー？」

京子が睨みつけると、手国は慌てた。

「すいません、すいません！
そんなつもりじゃないです！」

「あれ？
あんたどこかで…」

京子が気付くと、手国は背筋を伸ばした。

「申し遅れました！
自分はポニービール営業一課
手国匂と申します！」

京子の冷やかな視線は変わらなかった…

.

オープンカフェ
【カフェ俺】

京子と手国はオープンテラスにいた。
アイスコーヒーを頼む手国に対して、ここでもしっかりとモヒートを注文する京子
だった。

「あんた不器用でしょ？」

京子はモヒートを飲みながら言った。

「まあ、器用ではないです。
でも勢いはあります！」

手国の真剣な眼差しに、京子は吹き出しそうになった。

「ンッ、そうね、営業は勢いが大事よね…」

京子も残りのモヒートを勢いよく飲み干すと、おかわりを注文した。

「やっぱり課長さんともなると、貫禄ありますね」

「ちょっとやめてよ！

私まだ 24 だし」

「いえ、年齢とかじゃなくて。

仕事出来そうだなと思って」

「まあね

それは認める。

あんたうちで出してる『中出し生』って知ってる？」

「はい、もちろん！

今や業界売り上げ No. 1 じゃないですか」

「あれね、私が考えたの」

「マジっすか？

変態じゃないっすか！

『中出し生』なんて商品名」

「ちょっと待って、ちょっと待って！

商品名は違うの、商品名は違う人が付けたのー！

ホップを磨く大吟醸ビールっていう、味の方を私が考えたのー！」

「複雑っすね...

でもスゴイです！

それでまた新商品を出すんですよね？

マスターのあのビールで」

「そうね」

「東さんは営業能力もスゴいな～

よくあんな謎だらけのマスターから商品化を取り付けましたね？」

「う～ん、

それはちょっと違うかな。

マスターは元々夕陽ビールの社員だったし」

「え？」

「あのビールはね、マスターが社員の頃に考えたものなの。

そして完成したのは退社した後だった...

だから商品化は私が取り付けたんじゃなくて、マスターから頼まれた感じかな？」

「そうだったんですね...

どうりで何を言っても通じなかったわけだ」

「ごめんね。

そういうことだから諦めて。

あの目つきの悪い上司にもちゃんと説明しといてね」

京子は運ばれてきたモヒートを一気に飲み干すと、席を立った。

「これ、宮崎県産の完熟マンゴーです！

良かったら食べて下さい！」

このままじゃ終われない。

手国は必死に食らいついた。

「それもうわかったから」

京子は仕方なく受け取った。

「僕も東さんみたいになりたいです！

何でもいいです！ アドバイスください！」

手国は恥も顧みず、その場に土下座した。

「ちょっと！ 何してんのよ！」

いきなりの行動に、京子は周りの目を気にしながら慌てて引き起こした。

「どういうつもり！？

そういうのやめてくれる？

私が何かしたみたいに見えるじゃない！」

「すいません、すいません！

変えたいんです！

情けない自分を変えたいんです！」

「知らないわよ、そんなこと…」

切羽詰まって泣き始めた手国を一旦、椅子に座り直させた。
京子は仕方なさそうに一枚の名刺をテーブルに置いた。

「これはマスターが私に出した試験だった。
あんたもこの答えが解れば、少しは変われるかもね」

手国は涙を拭いて、名刺を手にとった。

天ぷらそば専門店

【麦山汁源】

住所 山形県 XXXX XXX XXXX

「て、天ぷらそば？」

「そう、
これだけ渡されても何のことか分からないでしょ？」

「自分、蕎麦アレルギーっす」

「はあ！？
やっぱあんたダメだ。
話になんないわ！」

「え？ あ、何か？」

「もういい！ 誘ったのはあんたよ。
会計はよろしく」

京子は付き合いきれないと、マンガーも置いたまま店を後にした…

第9話『網走支社』

ポニービール本社

【営業一課】

手国が外回りから会社に戻ると、課内はいつにも増して緊張感に包まれていた。

「あ、先輩！」

手国を見つけると、純子は駆け寄って来た。

「大変なことに…」

「どうした！ 何があった？」

二人は顔を近づけ、小声で話した。

「飛田さんと角田さんが、網走支社に転勤になりました」

「ええー！！」

手国は大声を張り上げた。

課内の中央のデスクで、ドンと構えるハゲタカが気付いた。

ニヤッと不敵な笑みを浮かべると、ゆっくりと手国の方へ近づいて来た。

それに合わせて、見知らぬ男二人が両側からボディーガードの様にハゲタカの両側に張り付いた。

長身の二人は黒のスーツ姿。

お互い長い髪を後ろで結き、危ない目つきをしていた。

対照的だったのは、髪の毛の色が黒色と銀色だった。

ご主人を守る、ドーベルマンとシベリアンハスキーのようだった。

危険を感じた手国は、純子を自分のデスクに戻した。

「よう、手国。

飛田と角田は網走支社に飛ばしたからな。

原因はお前の出来の悪さだ」

ハゲタカは不敵な笑みを浮かべながら言った。

「え！ 僕のせい？

どういことですか！」

「わかんねーか？

相変わらず鈍いやツだな。

お前は俺がやれって言った仕事やってるか？

やってねーよな？

それなのに飛田と角田の言うことはハイハイ聞く。ボスである俺の話は聞かねーのにだ。

おかしくねーか？

これは、組織の統率を乱す大問題だ！

お前みたいなクズを育てた飛田と角田には責任を取ってもらう！

そして組織とは何たるかを、もう一度叩き込んでやる。

それには網走支社が一番だ！

ハッハッハッー！」

ハゲタカは両脇の男たちと肩を組んだ。

「飛田と角田の代わりに網走支社から呼び寄せた。

今日からこの二人が、てめーの先輩だ。

堂辺 (どうべ) と蓮木 (はすき) だ。

ちゃんと言うこと聞けよ」

堂辺と蓮木は、手国の体に顔を近づけると、クンクンと臭いを嗅いだ。

すると、二人ともむせるように咳き込んだ。

「ボス、こいつダメですね」

「従う気ないですよ」

それを聞いてハゲタカはウンウンと頷いた。

「そっか、そっかー、

それは残念だ！

先輩がそう言うならしょうがねーか。

本当はやりたくないが...

有部純子を『特殊女秘書部隊』に送る！」

「え？」

『特殊女秘書部隊』とは、絶対に落としたい商談相手に送り込まれる、女スパイだった。

その存在は、一切表舞台に出ることはない、影の部隊だった。

特殊女秘書部隊の商談成功率は 100%

その成功率を誇るには、まず商談相手への徹底した下調べから始まる。

経歴、趣味、性癖...

そして、商談相手の完全な理想像の女として現れる。

心と体を支配することが目的だった。

商談相手を虜に出来れば、ミッションはほぼ成功となる。

だが、そこに行き着く為には、自分の人生を捧げなくてはならなかった。

商談相手の為に整形をし、時には結婚をし、好きでもない男の子供を産み、育てなくてはならなかった。

リスクもでかいが、報酬はそれ以上だった。

それが影の女スパイチーム

『特殊女秘書部隊』だった。

「ちょっと待って下さい！ 長谷課長！

やってます！ 言われたことやってます！」

「あ？

口だけで言うんじゃないよ」

手国は慌ててポケットを探り、名刺入れを取り出した。手を震わせながら、京子から貰った名刺をハゲタカに差し出した。

「これです！

この前、夕陽ビールのあの女の人に会って来たんです！

マスターのビールの答えがここにあるって言っていました！」

ハゲタカは名刺を見て、フンッと鼻で笑った。

「まあいい。

今回はこれで勘弁してやる。

よし！

行くぞ、作戦会議だ！」

ハゲタカはそう言うと、堂辺と蓮木を引き連れ、課内を出て行った。

すべてがその場しのぎだった。

手国は自分の無力さに天を仰いだ。

緊張感から解放されると、力が抜けて膝から崩れ落ちた...

.

♪ ピピピピ、ピピピピ、ピーピー

都内の1LDKのマンション。

寝室のダブルベッドの上で、目覚まし用にセットした携帯のアラームが鳴った。

京子はうつ伏せのまま、手だけで携帯を探す。

捕まえると、寝ぼけ眼で停止ボタンを押した。

「うう...」

再び枕に顔を沈めた。

また寝てしまったかと思ったら、急にガバッと起き上がった。

「よっしゃ！」

気合いを入れて顔を叩くと、ベッドから飛び降りてリビングへ出た。

とりあえず冷蔵庫の扉を開けた。

閉める。

また開ける。

何度開けても何もない。

京子はしかたなくコップに水道水を注ぎ、一気に飲み干し、渴いた喉を潤した。

「ぶはー」

頭を掻きながらリビングのソファにドサッと身を預けると、リモコンに手を伸ばしてテレビをつけた。

「続いてのニュースです。

昨夜未明、六本木にある BAR『ラブスラム』から火の手が上がり、全焼となる火災が発生しました。

出火当時、営業時間外だった為、ケガ人はいませんでしたが、地下室のビール工房が破壊されていることなどから、何者かによる犯行として警視庁は放火と器物損壊の容疑で犯人の行方を追っています。

次はスポーツです。

先日行われた、世界男子オープンペニス…」

「ええー！！？」

京子は一気に目が覚め、ソファから飛び起きた。

何がどうなった！？

寝ぼけた頭をフル回転させる。

あいつだ！

『さきっぽ生』を買い取ろうとして失敗したポニービールの目つきの悪いヤツ！

この前、鈍臭い部下にも会った！

ベラベラと余計なことまで喋ってしまった！

ヤバイ！ 私のせいだ！

そう思った瞬間、京子は居ても立っても居られなくなった。

とりあえずマスターに連絡しなきゃ！

て、こんな時に限って連絡先知らないしー！

化粧を瞬殺で終わらすと、スーツに着替えて家を飛び出した…

.

ポニービール本社

【営業一課】

誰もまだ出勤していない静かな課内。

「よし！

じゃあ、2周勝負な。

負けた方は、昼メシ奢りだぞ」

「はい！」

手国と純子は、掃除用のモップを持って構えた。

「レディーゴー！」

「キャー！」

「それー！」

二人はモップを押して走りながら、課内を楽しそうに掃除していた。

その微笑ましい雰囲気をぶち壊すかのように、バーン！ と勢いよく課内の扉が開かれた。

ビクッとして、急停止した二人が見た先には、血相を変えた京子が立っていた。

「あれ？ 東さん？」

手国は、すっとぼけた声を出した。

京子はツカツカと課内に入って行き、一直線に手国の前に来ると胸ぐらを掴んだ。

「あんたやってくれたわね！

あれが目的で私に近づいたのかー！」

「え？ え？

すいません！ すいません！

何のことです？」

「はあー？

とぼけんじゃないわよ！

マスターの店燃やしたでしょーが！」

「ええー！！

何すかそれ？

初耳っす！ 自分初耳っす！」

手国が悲鳴に近い声を出すと、純子が割って入って来た。

「先輩、誰ですか？ このオバサン」

カッとなった京子は、純子の横っ面を引っ叩いた。

「黙れクソガキ！」

それを見た手国も逆上した。

「東さんそりゃないっすよ！

いきなり叩くことないじゃないっすか！」

京子は手国の腕を取り、後ろで締め上げ、足を引っ掛けて顔から床に倒した。

「あんたらバカップルに付き合ってる暇は無いんだよ！

あの目つきの悪いヤツはどこよ！

早く言いなさい！」

「ヒィ～～

長谷課長なら、堂辺さんと蓮木さんを連れて昨日から出張です～」

「出張？

あんたまさか、私があげた名刺をアイツに渡したの？」

「すいませ～ん

渡しちゃいました～

でもそうしないと有部が特赦女秘書部隊に～」

「何よそれ！」

京子は押さえつけてた手を離すと、立ち上がった。

「しる爺が危ない！」

京子は手国を踏んでも構わず、勢いよく課内を飛び出した。

「いてて…」

手国は肩を押さえながら、ゆっくりと腰を起こして、その場にあぐらをかいた。

頬を抑えてしゃがみ込んでいた純子と向かい合った。

「先輩、特赦女秘書部隊って...」

「え？

ああ、ハゲタカのヤツが有部をそこに送るって言うからさ」

「それって、私を守ってくれたってことですか？」

純子は目を潤ませた。

「守ったて言うのかな？

でもやれることはやった」

「嬉しい...

私、先輩が好きです！

大好きです！」

純子は課内に響き渡るぐらいの声を出した。

「ちょ、ちょっと有部～

こんなカッコ悪い時に言わないでよ～」

手国は周りをキョロキョロすると、照れ臭そうに不器用な手つきで純子を抱き寄せた...

第10話『ピンクの軽トラ』

カナカナカナカナカナ～～

夕暮れの寂しさを煽るように鳴くヒグラシ。連なる山々のふもとまで広がる田園風景。
燃えるような夕焼けがすべてを紅く染めた…

茅葺き屋根の水車小屋。
正面の入口の横に、一枚板の看板が立て掛けてあった。

天ぷらそば専門店
【麦山汁源】

ハゲタカたちは、それを確認すると顔を見合わせて頷いた。

「ここだな。
お前たちは外で待ってろ」

堂辺と蓮木はコックリと頷いた。

ハゲタカは入口の格子戸を横に引いた。
ゆっくり足を踏み入れると、中を見回した。テーブル席が2つだけの狭い店内だった。

奥には水車を原動力にした石臼が見えた。
だが、今は動いていなかった。

ハゲタカは人の気配がないとわかると、店を出ようとした。

すると突然、床が起き上がった。

咄嗟に構えるハゲタカ。

よく見ると床ではなく、床と同じ色の作務衣を着た老人だった。

「なんじゃー男かー
つまらんのー」

しる爺は、尻のホコリを叩きながら立ち上がった。

「最後の客が男とはガッカリじゃ」

「最後の客？」

ハゲタカは構えた手を下ろして聞いた。

「そば屋は今日で閉店じゃ。
これからはホップの栽培一本でやっていくんじゃ」

ハゲタカは、ニヤリとした。

「失礼しましたご老人。
私は夕陽ビールの者です」

「なんじゃと？ 客ではなかったか。
フッフッフッフ
そうかそうか。
ホップ畑を広げる話じゃな？
しかしワシは機械を使ってないもんでう。
よくわからんぞ。

「おや？
そういえば、京子はどうしたんじゃ？」

「京子？」

ハゲタカは顔色を変えず、頭をフル回転させた。

名刺の名前を思い出す。

「東のことですか？
でしたら彼女はあいにく、体調を崩してまして、急遽、私が代役になりました」

「ええ～！

残念じゃのう～

京子と飲むために、山形の旨い酒を仕入れておいたのに～」

「まあまあ、それは東が元気になった時の、お楽しみということで。

それより早速ホップ畑を見せて頂きたい」

夕陽ビール社員になりきるハゲタカを全く疑う様子はなかった。

しる爺は溜息をつきながら言った。

「着いてきなさい」

頭を掻きながら仕方なさそうに店を出た、その瞬間だった。

「ご苦労様です！」

堂辺と蓮木が、しる爺の両側から勢いよく頭を下げた。

「うわ！ なんじゃ？

ヤクザの出迎えみたいじゃのう」

ハゲタカは舌打ちした。

堂辺と蓮木を睨みつけると、二人は慌ててニコニコしながら横に揺れた。

「これは夕陽ビール独特の挨拶です。

さあさあ、気にせずホップ畑に行きましょう」

「ありゃ？

日が暮れてきたのう。

明日にせんか？」

「ご老人、申し訳ない。

私たちは今日、東京に帰らなくてはならないのです」

「随分せっかちな男じゃのう。

しょうがない、あれを持ってくるか」

しる爺は店に戻ると、何やら手に持ってやってきた。

充電式の懐中電灯だった。

「お前さんの分はないからのう。
ワシの後をついてくるんじゃぞ」

そう言う、振り返ることなく店の奥の森へと入って行った...

「お前らはここで見張ってろ、
いいか、誰も通すんじゃねーぞ」

ハゲタカが言うと、堂辺と蓮木はニコニコしながら横に揺れていた。

「いつまでやってんだ！」

ハッとなった二人は、すぐに険しい顔でコックリと頷いた。

「へい」

ハゲタカはフンッと鼻を鳴らすと、獲物を狙うかのように、しる爺を追いかけた...

・
・

「ちょっとアリチン急いでよー！」

「あんた、この渋滞が見えないの？
急いだらカマ掘っちゃうじゃない！
オカマがカマ掘ってどうすんのよ！」

京子と有雄はピンクの軽トラで山形県の、しる爺のもとへと向かっていた。
あともう少しという所で、また渋滞につかまってしまった。

「アリチンまでマスターの連絡先知らないなんて思わなかった」

「私とマスターは心で通じ合ってるから、そんなものいらないのよ」

「じゃあ、その心の携帯で今どこにいるか聞いてみて？」

「ダメ、圏外」

「はあー？
全然通じ合っていないじゃん」

「うるさいわね。
文句ばっか言って。
横で座ってるだけなら抜け道でも探さないよ」

「あ、そこ左！」

京子は携帯の画面を見ながら言った。
有雄は慌ててハンドルを切った。

「ちょっとー！
もっと早く言ってよ！
危うく事故るところだったじゃない！」

「アリチン、その先の田んぼ道を右に入って！ それが一番近い」

「もうウソでしょー！
あんなところ通れるのー？」

軽トラの車幅とほぼ同じくらいの田んぼ道。
ゆっくりとハンドルを切ると、恐る恐るアクセルを踏んだ。

ガタガタと車体を揺らしながら進んでいく。
ヘッドライトの光りだけが頼りの運転に、二人は黙って集中した。

暗闇の田んぼの景色の中をユラユラとホタルが飛んでいるようだった。

田んぼ道を抜けると、舗装された道路に出た。
有雄はホッと一息ついた。

「アリチン、あと少し。
この道沿いに行けば左側に、しる爺の店が見えてくるから」

「京子、それより大丈夫？
マスターの店を燃やすような連中よ。
女のアんたに何が出来んの？」

「それはわからないけど、しる爺の身に何かあったら私のせいだし...

アリチンこそ大丈夫なの？」

「はい〜？

私をその辺のオカマと一緒にしないでくれる？

マスターと一緒に戦場をくぐり抜けて来たのよ！

修羅場の桁が違うわ！

正直、京子が足手まといにならないかって聞いているの」

「うっ...

どうしよう...

私でも戦える方法あるかな？」

「足元のバッグ開けて見なさい」

京子が座る助手席の足元に黒い大きなバッグがあった。

両手で持ち上げ、自分の膝の上に置いた。

ファスナーを開けて中を見ると、何やら道具らしき物が色々入っていた。

一番上にある道具を取り出した。

鉄パイプが2本、鎖で繋がれていた。

「ヌンチャク？」

「そうよ、それは鉄製だから威力抜群よ」

「無理！」

さらにバッグに手を突っ込み、他の武器を取り出した。

「何これ？

ハンガー？」

「違うわよ。それはトンファー

その短い方の柄を持って回転させれば、防御にも攻撃にもなるの」

「もっと無理！

ねえーえ、本気のヤツばっかじゃーん。

女の私でも使えるスタンガンとかないのー？」

「そんな洒落たものなんかないわよ！」

「あ、着いちゃった」

特に作戦も決まらないまま、しる爺の店に着いてしまった。
一旦道路脇に軽トラを停めると、車の中から様子を伺った。

店の前を黒のスーツ姿の堂辺と蓮木が、うろついているのが見えた。

「どっちも私のタイプじゃないわね」

有雄が言うと、京子はフッと笑った。

「じゃあ、容赦なくイケるね！
アリチンはどれ使うの？」

京子がバッグを広げて見せると、有雄は首を横に振った。

「武器はいらない。
私には『みこすり昇天拳』があるから」

「ええ～何それ～～」

京子はイヤな予感がした。

「あいつらは私ひとりで片付けるから。
京子は、お爺さんを探して」

「う、うん、わかった」

「行くわよ！
車ごと突っ込むから、しっかり掴まってて！」

有雄はアクセルを全開に踏み込んだ。
ピンクの軽トラは唸り声を上げた。

「さあ、パーティーの始まりよ！」

サイドブレーキを下ろすと、一気に加速した。店目掛けて急ハンドルを切った。

「キャーーーーー！！」

絶叫マシンでも乗ってるかのような、京子の悲鳴が響き渡った...

・
・

「やっぱ、ボスとの仕事はおもしれーよな」

「ああ、刺激強めの強炭酸て感じだ」

「でもよ、これが本当に仕事かって言ったら謎だけどな」

「アハハハー！ 確かに！」

堂辺と蓮木は店の前で談笑をしながら、軽い組み手をしていた。

ズザザザザーッ！

突然、砂利を巻き上げる激しい音が聞こえた。

動きを止めて、瞬時に音のする方を向いた。

すると、ヘッドライトをハイビームにして勢いよく突っ込んでくるピンクの軽トラが見えた。

「おい！ 何だあれ！？」

「ヤベーぞ！ よけろ！」

堂辺と蓮木は、弾けるように両サイドに飛んだ。

二人を跳ね飛ばす勢いの軽トラは、急ブレーキをかけ、砂埃を上げながら急停止した。

堂辺と蓮木はすぐさま立ち上がり、戦闘態勢を整えた。

バーン！

運転席と助手席のドアが同時に勢いよく開かれた。

ゆっくりと助手席から現れたのは、髪を後ろで結いたスーツ姿の女。
睨みを利かせて肩には鉄製のヌンチャクを引っ掛けていた。

反対の運転席から現れたのは、金髪のモヒカン。
ド派手な化粧にヒョウ柄の全身タイツの男？
バネがありそうな肉体美は、もはやヒョウだった。

「何だコイツら…」

堂辺と蓮木は警戒心を強め、構える拳に力を込めた。

「おいコラー、お前たちー！
しる爺はどこだー！」

京子は慣れない手つきでヌンチャクを振り回しながら、二人に近づいていった。

堂辺は京子の動きに合わせ、的確に前蹴りを手首に放ち、ヌンチャクを弾き飛ばした。

一瞬で固まる京子。

「すみません。
アリチンお願いします」

威勢よく出ていったものの、すぐさま有雄の影に隠れた。

「フッ、あんたのそういうところ嫌いじゃないわ。
大丈夫、ここは任せなさい。
京子は店の中を探して」

「了解京子！」

敬礼をすると、素早く後退りして店の中に飛び込んだ。

「さあ〜て、どっちからいこうかしら？」

言った瞬間、有雄は宙に飛んだ。

標的にしたのは堂辺だった。
反応が追いつく前に、胸ぐらに飛び降りた。

スーツの奥襟を掴み、全体重を後ろに引き落とすと、堂辺の体を宙に舞わせた。
柔道で言う巴投げを一瞬で決めた。
有雄は、そのまま自分の体も回転させると、マウントポジションを取った。

「てめー！」

呆気にとられていた蓮木は、慌てて有雄の顔を目掛けて回し蹴りを放った。
有雄は掴んだままの堂辺を無理矢理引き起こして盾にする。
蓮木の強烈な蹴りが、堂辺の後頭部を打ち抜いた。
堂辺の意識は一瞬で途絶えた。
有雄が襟を離すと、大の字に倒れた。

「何？ あんたたち仲悪いの？」

ゆっくり立ち上がる有雄に、蓮木はすかさずハイキックを放った。
有雄は瞬時に、しゃがんだ。
蹴りが頭上をかすめると、有雄は猫が飛び跳ねるような動きで、掌底を下から突き上げた。
狙った蓮木のアゴを的確に打ち抜いた。
ガンッと顔が跳ね上げる。
蓮木は空を見上げたまま、ガックリと膝から崩れ落ちた。
仰向けで倒れている堂辺の上に、重なり合うように倒れた。

「フフ、何よ。
本当は仲が良いじゃない。
さあ、お待ちかね。
みこすり昇天タ～～イム！」

有雄は両手を擦りながら、堂辺と蓮木を見下ろした...

・
，

「しる爺ー？ いるのー？
京子だよー」

店内に京子の声だけが虚しく響いた。

あ！ 床に隠れてるかも知れない。

サッとしゃがんで、辺りの床を探したが、しる爺はいなかった。
調理場や奥の石臼のところもシンとしていた。
電気が付いたままの店内。
ついさっきまで人がいたように感じる。

もしかしてホップ畑？

京子は慌てて店を飛び出した。

すると、少し離れた先で、堂辺と蓮木が仰向けに並んで倒れているのが見えた。

有雄はというと、しゃがみ込んで蓮木の股間の辺りで何やらモゾモゾしていた。

「？」

よく見ると、蓮木の股間を両手で挟み、高速で擦っていた。

「もう～何やってんのよ～
アリチ～ン」

京子が呆れていると、隣りで倒れていた堂辺がムクムクと起き上がったのが見えた。

有雄は、みこすり昇天タイム中で気付いていない。

「え？ あ？ どうしょ？」

堂辺はスーツの内ポケットに手を入れると、何かを取り出して有雄の首筋に当てた。

バチチッ！

ビクッと痙攣した有雄は次の瞬間、パッタリと倒れた。

スタンガンだった。

「ウソでしょー？
何でそっちにそれあんのよー！」

堂辺は京子に気付くと、フラフラとスタンガンを突き出しながら近づいてきた。

後退りする京子。

コツンと踵に何かが当たった。

足元を見ると、さっき蹴飛ばされた鉄製のヌンチャクだった。

意を決した京子はヌンチャクを拾い、堂辺を迎え撃つように構えた。

「何でお前らなんかに…」

意識がまだ朦朧としている堂辺。

動きは、ぎこちなくゾンビのようだった。

京子は今ならいけると確信した。

突き出してくるスタンガンを弾き飛ばそうと、全力で下からヌンチャクを振り上げた。

ドンッ！

鈍い音とともに、鉄製のヌンチャクは堂辺の股間を突き上げた。

「あ、間違えた！」

狙い所は違ったけど手応えはあった。

堂辺は声にならない声を上げると、スタンガンを落とし股間を押さえてうずくまった。

京子はすかさずスタンガンを奪い取った。

あたふたとスイッチを探し、堂辺の首筋目掛けて押し当てた。

.

バチチッ！

ビクッと痙攣すると、股間を押さえたまま前のめりに倒れた。

「ヒュ～

何これ～！？」

京子は待ってましたと言わんばかりに、武器を鉄製のヌンチャクからスタンガンに持ち替えた。

ふと有雄を見た。
蓮木と共に仲良く倒れている。
起こしてる暇はない。

しる爺と目つきの悪いアイツ...

京子は右手にスタンガンを持ち、左手で携帯のライトをかざした。
ホップ畑へ続く暗闇の森の中へ、警戒しながら一歩ずつ前に進んでいった...

第 11 話 『ボスの味』

「これがワシの自慢のホップ畑じゃ。
30 年かけて作りあげた血と汗と汁の結晶じゃ。
後は、お前さんたちに任せる。
頼んじゃぞ」

しる爺が懐中電灯でホップの木を照らしているとハゲタカは、もぎ取るように懐中電灯を奪った。

「このホップがなけりゃ、あのビールは出来ないってわけか」

「なんじゃと？」

しる爺はハゲタカの急変した態度に固まった。

「爺さん、ひとつ教えてやるよ。
知らないヤツにベラベラと自慢話はしないことだな。
どこからともなくハゲタカが飛んで来て、全部喰われちまうぞ」

「な、何を言っとる？
お前は一体誰なんじゃ！？」

後退りすると、つまずいて畑の土に倒れた。

「あばよ爺さん。
このホップ畑と共に土に返りやがれ」

ハゲタカは右手の指先に力を込めると、しる爺の喉仏を狙った。

すると、ホップ畑に通じる道から、小さな光を揺らしながら声が聞こえてきた。

「しる爺ー！ しる爺ー！

いたら返事してー！」

しる爺はハッとする。
聞き覚えのある声だった。

「京子ー！ ワシじゃー！
変なのおるー！
助けとくれー！」

ハゲタカは舌打ちした。

あの女か...

右手の力を抜き、京子が来るのを待った。

京子は息を切らしながら、しる爺のもとに辿り着いた。

「しる爺！」

「京子！」

しる爺は素早く飛び起きると、すがりつくように京子の胸元に飛び込んだ。
京子は反射的に避けてスタンガンのスイッチを押してしまった。

バチチッ！

しる爺はビクッと痙攣すると、時が止まったかのように固まって倒れた。

「ああー！
ごめーん！ しる爺ー！」

慌てて、しる爺の体を揺すったが、グニャグニャと骨のないイカのようなだった。

「アッハッハー！
面白れーな、おめーら」

ハゲタカは京子に近づき、懐中電灯の光を顔に当てた。

瞬間的に視界が奪われた京子は、闇雲にスタンガンを振り回した。
ハゲタカは軽くあしらい手首を取った。

力を込めると握力でスタンガンを落とした。

「痛い！」

「フンッ、小娘が。
世の中の恐ろしさを教えてやる」

ハゲタカがさらに京子の手首を捻り上げた瞬間だった。

ガサササッ

突然ホップの木が揺れた。

「！？」

ハゲタカは揺れてるホップの木に懐中電灯の光りを当てた。

ガサササッ

違う隣りの木が揺れた。
懐中電灯の光りが後を追った。

ガサササッ

さらに隣りの木が揺れた。

何かいる！

危険を感じたハゲタカは、京子が落としたスタンガンを拾った。

その瞬間だった。

「あーしゃーせー」

ハゲタカの背後から大蛇のような二の腕が、首に巻きついた。

「グッ」

ハゲタカは咄嗟に、巻きつく腕にスタンガンを押し当てた。

パチチッ！

ビクともしなかった。

腕がダメならと脇腹にスタンガンを押し当てた。何度もスイッチを押し、電流を流しまくった。

パチチッパチチッパチチッ！

ビクともしなかった。

それどころか、ハゲタカの首を締め上げる力がどんどん増していく。

こいつバケモノか！？

このままでは締め落とされる。

ハゲタカは手刀を巻きつく腕と首の隙間に滑り込ませ、一気に突き上げると首を引き抜いた。

「ゴホッゴホッ…」

その場にうずくまり、飛びそうになった意識の回復を待った。

「マ、マスター！？」

京子は口を押さえ泣きそうな声を出した。

「大丈夫か？ 京子」

マスターは振り返ると、何事もなかったかのような雰囲気と言った。

「え？ ウソ？

今、私の名前…」

京子は信じられないと、さらに口を押さえた。

マスターは一瞬ビクッとして固まってしまった。

「強行突破しようとする、今日この日を無駄にしよう。

強固な気持ちを持って、今日行動すれば…」

「ああ～もう何でもない！
気にしないでマスター！」

そんなやりとりをしている間に、ハゲタカの意識が回復した。
背を向けているマスターに対して、側頭部にハイキックを放った。

ドガッ！

「キャー！」

京子は悲鳴を上げ、両手で顔を覆った。

マスターはビクともしていなかった。
ゆっくり振り返ると、ハゲタカと対峙した。

「フッ、やっぱり貴様か。
最初に会った時に、こうなと思ってたぜ」

「俺はお前と会う前から、こうなと思っていた」

「フッ、相変わらずフザけた野郎だ」

ハゲタカは言ったと同時に踏み込むと、ワンツートをマスターの顔面に打ち込んだ。
打ち終わりに右のローキックを決めた。

マスターはビクともしなかった。

ハゲタカは舌打ちすると、続けざまに左右のフックを何発もマスターの顔面に打ち込んだ。
首根っこを掴み、膝蹴りを脇腹に何発も突き刺した。

マスターはビクともしなかった。

逆に息切れしてしまうハゲタカだった。

「お前が自慢する強さとはその程度だ。
飛べない鷹は、空を恐れてハゲるのさ」

マスターはバツと両手を突き出すと、ハゲタカの髪の毛をワシ掴みにした。

「飛び立つ準備はいいか？」

「クソッ」

ハゲタカはマスターの両手を払いのけようとしたが、ピクともしなかった。
そのままの状態から、一気に体ごと振り回された。

人間ハンマー投げのようだった。

回転はさらに加速していく。

遠心力に耐えきれなくなった髪の毛は、ブチブチと音を立てて抜けていった。
掴んだ髪の毛が全て抜け切ると、ハゲタカは夜空に舞った。

10メートルは飛んだであろうか。

糸の切れた操り人形のように、ドサリと頭から落ちた。

マスターは、思ったより距離が出なかったことに首を横に振った。

不満そうに近づいていく。

交通事故にでもあったかのようなハゲタカを引き起こすと、服を握力だけで引きちぎった。

次々と引きちぎっていく。

あっという間に素っ裸にしてしまった。

「少しは軽くなったな。

次はどこまで飛ばそうか？」

「ここで充分です～」

ハゲタカは頭と股間を押さえながら、声を振るわせた。

「そうか」

マスターは握りしめた拳を薪割りのようにハゲタカの頭に振り下ろした。

ドスン！

ハゲタカは頭から地面に叩きつけられた...

.

京子は事態の收拾を警察に託した。

山形県警に通報すると、直ちに数台のパトカーが到着し現場検証が行われた。

その時すでにマスターは姿を消していた。

京子以外、皆んな倒れている状況。

全員の意識が戻り、事情聴取に至るまでには時間が掛かった...

.

「先月六本木の BAR『ラブスラム』が全焼した火災。ポニービール社員、長谷高雄容疑者が放火と器物損壊の罪で逮捕されました。長谷容疑者は仲間を引き連れグループで犯行に及んだ模様です。さらに逮捕当時、山形県のホップ農園の経営者を脅迫していたことも判明しました。放火と器物損壊に加えて脅迫の犯行の裏には、夕陽ビールの新商品開発を阻止するための破壊工作であったことを供述で明らかにしました。さらなる余罪も含めて、警視庁は取り調べを進めていく方針です」

テレビの画面に、護送車から連れ出されるハゲタカが映った。

グレーのトレーナーを身に付け、髪の毛がむしり取られた姿は、まさにハゲタカだった...

.

ポニービール本社

【営業一課】

手国と純子は出勤すると同時に駆け寄った。

「先輩！ 今朝のニュース見ました？」

「ああ、見たよ。

ハゲタカは本当にヤバイやつだった」

ハゲタカがいた営業一課は、朝からバタバタと慌ただしかった。

ポニービール社長

辛川 淳 (つらかわ あつし)

も登場し、事件の火消しに必死になっていた。中央のデスクの前に皆んなを集めた。

「長谷たちがやったことは、ポニービールの意志ではない！ あいつらが単独でやったことだ！ いいか、何を聞かれても知らぬ存ぜぬを通すんだ！」

本社に緊張感を持たせる為、網走支社からハゲタカを呼んだのは間違いだった。
緊張感どころか会社の信用を失うほどの事件を起こしてしまった。
余罪の可能性も消さなくてはならない。網走支社は直ちに閉鎖となった。
数十名いた、はじかれ社員たちは退職金を積まれ事実上クビだった。
唯一、網走支社で生き残ったのは、ハゲタカが強制的に転勤させた飛田と角田だった。

二人は、本社の営業一課に帰ってきた。

さらに、

「平が退職した後、課長を引き継いだのは飛田と角田だ！
ふたりでひとり、ニコイチ課長だ！
長谷なんてヤツはここには居なかった！
わかったな！」

「よろしくお願い致します！」

辛川社長の後ろにいた、飛田と角田は皆んなの前に現れ、深々とお辞儀をした。
その姿を見て、手国は嬉しさを隠せなかった。

「やったー！ バンザーイ！ バンザーイ！」

「バカモーン！
何がバンザイだー！」

「すいません、すいません！」

辛川社長に怒鳴られると、手国はすぐさま両手を下ろした。

「あ！」

と何も思い出してないのに、思い出したフリをして、その場から逃げた...

.

幻の中華
【巫女巢里飯店】

ランチタイムも終わり、店の入り口の前には『準備中』の札が掲げられていた。
静かな店内。
壁に埋め込まれたテレビの音だけが響いていた。
店の中央の回転式の丸テーブル席で、テレビを見ながら松花皮蛋をつまみに、白酒を飲んでる京子がいた。

「マスターから連絡あった？」

そう言いながら厨房からヒョウ柄のチャイナドレスを着た有雄が現れた。

「全然、そっちはどう？ アリチン」

「悔しいけどないわ。
でも、近くに匂いは感じてる」

有雄は京子の前に小皿を差し出した。

「何これ？」

うずらの卵のようなものが3個、
串に刺さっていた。

「ボス猿のキンタマよ。
社長の女を目指すなら食べときなさい」

「目指してないし！」

有雄は京子の隣の椅子に腰掛けると、小皿と一緒に持ってきたドラゴンハイボールで乾杯した。

「ボス猿のキンタマって3個もあるの？」

京子はまじまじと見ながら聞いた。

「あれ？ 一個多いわね。
予備かしら？」

「予備って何よ！」

京子と有雄は目を見合わせると、吹き出した。
すると、テレビはニュース番組になっていた。

「先日、夕陽ビールの新商品に対して破壊工作を行った、ポニービール社員の長谷高雄容疑者の余罪が明らかになりました。網走支社に勤務していた当時、ロシア人を不当に雇い、違法ウォッカを密漁ホタテとセット販売させていたことから『異人変酒隠蔽貝柱』の罪で再度逮捕されました」

「どういう罪よ！
つか、こんなヤツどうでもいいわ！
それより燃やされたマスターの店は一体誰が責任取るのよ？」

「それは今、うちの社長が戦ってくれてる。
弁護士雇ってポニービール相手に訴訟を起こしてるみたい。
ポニービールは、知らぬ存ぜぬを通すつもりらしいけど、佐原社長はそうはさせない。
『さきっぽ生』の宣伝も含めて、マスコミを利用して徹底的にやるつもりだって。
マスターの店も新しく建て直してくれるって言ってくれたわ」

「京子、あんた社長に抱かれた？」

「はあ？
何でそうなるのよ」

「だってそうじゃない！
大企業の社長が小娘のあんたの話をホイホイ聞いてくれるなんて、おかしくない？」

「ホイホイって...
それは私が夕陽ビールの為に頑張ってる分、応えてくれてるだけじゃない？」

「あー！ この女ウソ臭ーい！
そんなこと言って本当は社長に金だけ出させて実はマスター狙ってるでしょ？」

「ええ！？」

「ほらほら！ 当たってるから驚いてるー！
マスターに恩を売ってモノにしようとするなんて浅ましい女！」

「はあー？ 訳わかんない！
何暴走してんのよ！
これでも食って落ち着け！」

京子は、ボス猿のキンタマ串を有雄の口に突き刺した。
有雄はそのままモグモグと食べた。

「うん、ボスの味ってイケるわね。
私も社長に抱かれたくなっちゃった～」

「だから抱かれてないっつーの！」

京子は呆れて背中を向けると、白酒を瓶ごと煽った...

第12『フォークシンガー』

六本木の夜空に摩天楼のように浮かび上がる東京タワー

駅前の首都高下の交差点は、繁華街へと流れていく人で溢れていた。
そんな人混みの中、横断歩道の片隅でフォークギターを掻き鳴らし、熱唱する青年がいた。

♪

両手で支えてくれる～
君の気持ちに応えるよ～
お釣りを返す君の手を～
僕はそっと握り返した～

なのになぜ叩く～
なのになぜ叩く～

「うるせーバカヤロー！」

酔っ払ったオヤジが唾を吐いて通り過ぎた。
他の人たちも眉間にシワを寄せ、迷惑そうに通り過ぎていった。
皆んなを不快にさせたのは、歌詞の内容ではなかった。

彼は驚くほど音痴だった。

情熱的でキレのあるギター演奏は素晴らしかった。
だが、せっかくの演奏も歌い出した瞬間に騒音へと変えてしまっていた。

「チッ、またダメか...
今回の曲は自信あったのにな...」

彼の名前は、
久寺家 早太 (くじけ そうた)

高校時代に始めたギターは、努力もさることながら眠っていた才能を開花させて、プロ並みの腕前にまで上達した。

3年生の頃に仲間と組んだバンドでは、文化祭を大いに盛り上げた。

ゆくゆくは早太がミュージシャンになることを皆んなが期待した。

それはあくまでギターリストとしてだった。

だが、早太は何を勘違いしたのか、歌など歌ったことがないのにも関わらず、フォークシンガーになると宣言して高校卒業後、意気揚々と上京した。

フォークギターひとつだけで、ストリートから売れることにこだわって、仲間という仲間も作らず孤独を気取っていたため、早太が音痴だということを教えてくれる者は誰もいなかった。

フォークシンガーを目指して田舎を飛び出し、早3年。

何の結果も出せないまま、時間だけが無駄に過ぎていった。

悔しさを噛みしめて上を見上げても、六本木の夜空に星は見えなかった。

「クソッ、これが東京か...」

東京は関係なかった。

早太はギターを抱え、敗北感を背に交差点を後にした。

この先どうすれば、何をやっていけばいいのか、もはや分からなくなっていた。

首都高沿いの歩道をひたすら歩いた。

すると、視界の先に赤提灯をぶら下げた屋台が見えた。

早太は、ふと懐かしさを覚えた。

昔、夜中に小銭を握りしめて食べに行った屋台のラーメン。

赤提灯に吸い寄せられるように近づいていった。

「ん？」

赤提灯に書かれた文字を見て立ち止まった。

カラオケ BAR

【ラブスラム】

カラオケ BAR！？

早太は恐る恐る暖簾をめくった。

すると、黒光りしたスキンヘッドのイカつい男が何かを磨いていた。

カラオケ用のマイクだった。

早太は慌てて暖簾を下ろした。

「あーしゃーせー」

暖簾の向こう側から声が聞こえた。

やべー！

気付かれたー！

早太は仕方なく暖簾をくぐり、辺りを見回しながら長椅子に腰を下ろした。

目の前には何種類もの酒瓶が並び、天井にはスピーカーがぶら下がっていた。

マスターらしき男は、袖を切り落とした黒シャツ姿で、盛り上がった腕の筋肉を確認しながらマイクを磨き続けていた...

何とも言えない沈黙が続いた。

「屋台でカラオケっすか？」

耐えきれず早太は口を開いた。

「ああ、一曲いってみるか？」

マスターはそう言うのと磨いていたマイクを早太の前に、そっと置いた。

「あ、いや...」

罵声を浴びて終了した路上ライブの後、歌う気になどなれなかった。

マスターはマイクを下げると、代わりにグラスを置いた。

「？」

マスターは屋台の下から、何やら怪しい壺を取り出した。蓋を開けると、ポワ〜んとか

れまた怪しい香りが漂った。

豆柄杓でゆっくりと壺の中を掻き回す。

すくい上げた液体は、早太の目の前のグラスに注がれた。

「なんスカ？ これ」

「これは今のお前だ」

マスターが言うと早太はドキッとして、グラスの中の液体を覗き込んだ。

酒なのか何なのか、ドブみたいに濁っていた。

これが俺だって言うのか？

気に入らなかったが、ヤケクソで一気に飲み干した。

「マズっ！」

早太は、むせて咳き込んだ。

「そうだろう。

失敗したのに、捨てずにそのまま継ぎ足して作った酒だからな」

「ゴホッゴホッ、

何でそんな酒を俺に？」

マスターは壺を両手で掴むと、地面に落とした。

ガッシャーン！

「ええーーーー！？」

壺は砕け、酒が辺り一面に飛び散った。

「近くに見えたはずなのに

気づけば遠く離れてる

飛べると信じたはずなのに

落ちてることさえ分からない

見失ったんじゃない

最初から見えていなかった

叶わない夢だと知ったなら
夢の形を変えればいい」

マスターの言葉に早太は衝撃を受けた。

素っ裸にされて頭を撃ち抜かれたたようだった。

「気に入ったか？
失敗した酒なら、いくらでもあるぞ」

マスターはそう言うと、しゃがんで屋台の下の壺を物色し始めた。

早太の中にメラメラと上京したての頃の熱い感情が湧き上がった。

「マスター！ お願いだ！
今の歌詞で歌ってくれよ！
曲なら俺がギターを弾く！」

「へ？」

とぼけた声を出して立ち上がったマスターは、サングラスを掛け、片手にはマイクを握りしめていた。

歌う気マンマンだった。

その姿を見た瞬間、早太の顔から笑顔が溢れた。

「ヒュ～、そうこなくっちゃ！」

すぐさま立て掛けていたギターを振り上げた。
今の熱い感情をそのまま曲にしてギターを掻き鳴らした。
元々素晴らしかった早太のギター演奏は、さらに情熱的でリズムカルだった。

マスターは曲に合わせて歌い出した。

♪

鏡を見ないで化粧する～
勇気じゃないの恋占い～
ラッキーカラーはあなたの顔色～

脇毛のエクステなびいてる～
翼じゃないの脇だから～
見えないオシャレのチラリズム～

オーガニックに憧れて～
裸で暮らす私を責めないで～

スピーカーから響き渡るマスターの歌声は、体の芯を揺らすような迫力があつた。
その歌声に早太のギターはさらに乗ってくる。

高まっていく二人の演奏は即興なのに、すでに完成された曲のようだった。

ジャラン...

早太はいきなりギターを弾くのを止めた。

「マスター！
さっきの歌詞と全然違うじゃないか！」

「2 番だ」

「何でいきなり 2 番なんだよー！」

早くも方向性の違いを見せる二人だった。

「あの一、すいません」

弱々しい女性の声が、早太の後ろから聞こえた。声のする方へ振り返る。

そこには、ごく普通の若い女性が二人立っていた。

「今の曲って誰のですか？
良かったら、もう一回聞かせてもらえますか？」

早太は衝撃を受けた。

3 年間一度も言われた事のなかった言葉。
涙が出そうなくらい嬉しかった。
いやいや、浸ってる場合じゃない。
すぐさま正面に向き直り、マスターを真っ直ぐに見た。

「今の曲もう一回聞きたいって！
どうする？ マスター！」

「オーダーが入れば、作るのが料理人だろ」

「俺、料理人じゃないって！」

早太はギターを担いで、屋台の前に飛び出した。
観客は二人だったが、気分はすでに武道館。
ギターを構える姿は、大舞台に登場するロックスターのようだった。
空に突き上げたピックを振り下ろすと、激しく弦を弾いた。
情熱的でリズムカルな演奏は、聞いてくれる人がいると、さらに熱がこもった。

女の子二人は感動の波にさらわれていた。

そのタイミングを見計らったようにマスターは歌い始めた。

♪

近くに見えたはずなのに～
気づけば遠く離れてる～

心に響く歌声だった。

屋台の裏で歌っているマスターを不思議に思いつつ、女の子二人は曲のリズムに合わせて手拍子を始めた。
その姿を見た早太のパフォーマンスもエスカレートしていく。
頭を激しく振り、荒々しくギターを弾いた。
もうノリノリになっていた女の子二人に釣られて、足を止める人がポツリポツリと現れた。

気がつけば、早太たちの演奏に引き込まれた人たちは、歩道が通れないほどまで膨れ上がっていた。
まさに屋台をステージとした野外ライブ。

屋台ボーカル & パフォーマンスギターという、新しい形のユニットが誕生した。

♪

盗んだパンツを返しにいく～

人違いでしたとは言えぬまま～

曲はすでに3番にまで突入していた...

第13話『記憶喪失』

夕陽ビール本社最上階

【社長室】

最上階の景色を一望出来る巨大な窓ガラスをバックに、オークを基調とした重厚な社長専用デスク。

広々とした室内の中央には、来客用のソファがふたつ、ローテーブルを挟み、向かい合うように置かれていた。

その片方のソファに、ドッシリと構える佐原社長の姿があった。

向かいのソファには、背筋をピンとさせて腰掛ける京子がいた。

「社長、この度はお疲れ様でした。

ポニービールとの一件、テレビで拝見させて頂きました」

「ハッハッハッ！

話題に飢えてるマスコミを使うのが一番だと思ってな。

知らぬ存ぜぬを通そうとした辛川を、まんまと追い詰めてくれたわ。

ようやく事件を認めた時には、辛川は破壊工作の首謀者だと吊し上げられていた。

それを俺が肩を叩いて許してやったパフォーマンスも良かったろう？」

「はい、さすがです。

心の広い夕陽ビールの佐原社長というイメージが根付いたと思います」

「ハッハッハッ！

実際は金で解決したんだがな！」

「『さきっぱ生』の宣伝もしっかりとされていた辺り。

佐原社長は、やり手だと思いました」

「そりゃそうだろう。

罪を犯してまで奪いたかったビールなんて、この上ない宣伝だからな。使わない手はない。

ところで、肝心の『さきっぱ生』の製造は上手くいってるのか？」

「はい。

新種のホップ畑は麦山さんの指導の元、大幅に拡大し、収穫量も数段アップしています。
醸造工程に関しては本来、升田さんに監修して頂きたかったのですが、未だ行方不明でして...

升田さんが会社に残してくれたレシピを元に私が何とか調整しています」

「ビールの味は、君が見てるなら問題ないだろう。

期間限定でも構わん、早々に売り出すぞ。

今を逃したら宣伝効果が薄れる。

製造が追いつかなくて売り切れたとしても、それはそれでまた話題となる」

「お見事です。

そこまで見越してマスコミを利用したんですね」

「フッ、驚くのはまだ早いぞ」

佐原社長は不適な笑みを見せると、片手を高々と上げ、指を鳴らした。

パチンッ！

すると、待機していた秘書がトレーを持ってやって来た。

トレーに乗っていたのは、ジョッキに注がれた生ビールだった。

秘書はテーブルにコースターを敷くと、京子の前に生ビールを置いた。

「こ、これは？」

「君の自信作

大吟醸ビール『中出し生』だ」

「は、はあ...」

京子はよく分からなかった。

「何も気にすることはない。

グイッとやってくれ」

勧められた酒は断らない京子。

ジョッキを掴む手に、ためらいはなかった。

口元に運ぶと、ゴクゴクと喉を鳴らして飲んだ。

ジョッキを置くことなく、一気に飲み干した。

「プハーっ！」

見ていて気持ちのいい飲みっぷりだった。

「それだー！」

佐原社長は京子を指差し、興奮気味に立ち上がった。

「実にいい飲みっぷりだ！

それでいて華がある！

『さきっぽ生』の CM は、

東くん、君で決まりだー！」

「え？ え？

ええーーーーー！？」

京子の驚きの声が、広々とした社長室内に響き渡った...

.

スライディング BAR

【流れ星】

「あんたが私を飲みに誘うなんて初めてじゃない？

しかもこんな洒落た店」

「今日は急にゴメンね。

アリチンに相談したいことがあって...

あ！ もちろん、ここの飲み代は私が出すから遠慮なく頼んで」

京子是有雄の店の休みに合わせて、六本木駅近くの BAR に連れ出していた。

通りに面したガラス張りの店。

店内はカウンター席だけが横一列に並ぶ。

照明は七色に光る LED の間接照明。

バーテンの若いイケメンが、スカした感じのこの店は完全に女ウケを狙っていた。

だが、流行っていないのか、客は京子と有雄の二人だけだった。

「私、喉乾いてるから生ビールいくわ。

あんたも同じでいい？」

「全然 OK」

有雄はバーテンに注文した。

イケメンバーテンは、軽く会釈をするとスカした素振りでピルスナーグラスに生ビールを二杯注いだ。

すると、有雄たちとは離れたカウンターテーブルの上に生ビールを置いた。

「？」

バーテンは有雄たちにウィンクをすると、ピルスナーグラスをスッと横に流し、カウンターの上を滑らせた。

映画のワンシーンのような演出。

ピタッと二人の前でグラスが止まった。

「ちょっとー！

ビール入ってないんだけどー！」

滑らせた勢いでピルスナーグラスの生ビールは、ほとんど溢れていた。

「えっ、あっ、

どうしましょう？」

「どうしましょ？ じゃないでしょー！

ちゃんとしたビール持って来なさいよ！」

有雄が呆れて言うと、バーテンは慌てて生ビールを注ぎ直した。

「こりゃ流行らないわけだ…

で？

改まって相談て何よ」

有雄は京子に向き直すと、普通に運ばれてきた生ビールで乾杯した。

「うん、実はね。

『さきっぽ生』の発売が決まったのはいいんだけど…

その CM に私が出ることになっちゃって」

「はあ～！？

あんたついに社長のケツの穴でも舐めた？」

「ちょっと待って！

今日は暴走しないで！」

「せっかくの休みに、何であんたの自慢話を聞かなきゃいけないのよ」

「私がCMに出ることは、どうでもいいのアリチン。

問題はCMで流す曲よ！

それを私に決めて欲しいって、社長から頼まれちゃったのー！」

「はあ？ それこそ何よ？

そんなの自分が好きな曲を言えばいいだけじゃない」

「そうなんだけど...

私、音楽とか聞かないから」

「あーそうだった！

あんた若いくせにSNSもやらないし、仕事終わりに飲んだくれてるだけの昭和のオヤジ
みたいな女だもんね」

「うう～確かにそうです。

だから、ミーハーなアリチンに最近の曲を教えてください」

「失礼ね、私ミーハーじゃないわよ。

意識が高いって言ってくれる？」

「はいはい、その高すぎる意識は東京タワーも越えました～」

「なんかムカつくわね。

まあいいわ」

そう言いながらも有雄は、携帯をいじくり、これだと分かった京子に見せた。

そこに映っていたのは何かの動画だった。

スピーカーをぶら下げた屋台をバックに、フォークギターを構える一人の青年。

突然、取り憑かれたようにギターを掻き鳴らした。

♪

近くに見えたはずなのに～
気づけば遠く離れてる～

歌声が聞こえてきたが、青年は歌っていなかった。屋台の前で髪を振り乱し、荒々しく動き回りながらギターを弾き続けていた。

不思議なパフォーマンスだったが、曲は素晴らしかった。
携帯からの小さな音にも関わらず、京子は聞き入ってしまった。

「面白いでしょ？
屋台ボーカル & パフォーマンスギターだって」

京子の反応を見て、有雄は満足そうに微笑んだ。

「すごい…
なんか歌声が…」

京子は目に涙を浮かべ、声を震わせた。

「ハハ、何？
そんなに良かった？
でもね、この子はまだメジャーデビューしてないのよ。
ストリートでやってる姿が SNS に投稿されて、今バズってるって感じ」

「この人の名前は、屋台ボーカル何とかっていうの？」

「それは演奏スタイルね。
名前は確か…
『ベシオソウタ』だったかな？」

有雄が言うと、京子は涙を拭いて考えを巡らせた。
答えがまとまると、大きく頷いた。

「よし！ 決めた！

『ベシオソウタ』をデビューさせる！
『さきっぽ生』と一緒に新発売よ！」

「どひゃー！ 何その勝手な発想！

この女、末恐ろしいわね」

有雄は肩をすくめると、残りのビールを一気に煽った...

.

カラオケ BAR

【ラブスラム】

「マスター、
俺たち今じゃ SNS で時の人になってるぜ。
...ほら」

早太は屋台の長椅子に座り、向かい側で何かを磨いているマスターに、携帯の動画を見せた。

マスターは磨いていたコケシを置くと、携帯の画面を覗き込んだ。

そこに映っていたのは、観客のひとりが撮影したと思われる、屋台をステージに見立てた『ベシオソウタ』の路上ライブだった。

屋台の前でギターを掻き鳴らす早太は終始動き回り、観客を挑発したりウィンクしたりとやりたい放題だった。

「すっかりロックスター気取りだな」

「そう言うなって。
水を得た魚と言ってくれよ」

早太は得意気に言うと動画を止め、壺の酒が入ったグラスを一気に飲み干した。

「くう～、やっぱマジーけどウメー！」

その後ろで弱々しい女の子の声が聞こえた。

早太は声のする方へ振り返った。

「あの～、今日のライブは何時からですか？」

一番最初にファンになってくれた女の子二人だった。

「あ、あー、ごめんよ。

今日はナシだ。

ギター持って来てねーし」

愛想なく断ると早太は向き直り、酒のおかわりを注文した。

マスターは「フン」と鼻を鳴らし、壺の酒を注いでやった。

「天狗になるには早すぎる」

「いやー、スターにも休みは必要っしょ？

全部に応えてたら息が詰まっちゃう」

「俺は天狗と組んだ覚えはない。

伸び過ぎた鼻ならヘシ折るぞ」

「おいおい、脅かさないでくれよ！

わかってますって。

お客さんにもマスターにも、ちゃん感謝してますよ～」

早太はヘラヘラしながら酒を口にすると、携帯が鳴った。

知らない番号だった。

早太は構わず電話に出た。

「ハーイ！ 人気沸騰中の

『ベシオソウタ』でーす！

え？

あ、はい。

いえ、そういうのはまだ、特に決まってないっす。

え！ マジっすかー！？

いやいや、もちろん OK っすよ！

はい！ こちらこそよろしくお願いします！」

お辞儀をしたまま電話を切った。

早太の体はプルプルと小刻みに震えていた。

ガバッと顔を上げると、興奮で目が血走っていた。

「マスター！

やっぱり俺の鼻をヘシ折ってくれ！

じゃねーと、どこまでも伸びちまいそうだ！
俺たちの曲が CM ソングに選ばれた！

スポンサーはあの『夕陽ビール』だ！」

マスターの磨いていたコケシの頭が取れた...

.

緑川スタジオ・シティ

【第7スタジオ】

「はい、では先に『ベシオソウタ』の MV(ミュージックビデオ) 撮影です。
その後、バック(背景)は変えずに、そのまま『さきっぽ生』の CM 撮影となります。
MV を撮り終えたら、すぐに出番となりますので、東さんはあちらの椅子でお待ち下さい」

スタッフは慌ただしく、京子に説明する。

『ベシオソウタ』にオファーをしたのは、京子だったが、それ以降の内容や段取りは、専門のスタッフが仕切っていた。

すでにスタジオに作られた迫力のあるセットは、爆撃にでもあったかのような瓦礫の街だった。

『新種のポップ』を探しに中東に渡り、内戦に巻き込まれたエピソードをイメージしているのだろうか？

まず『ベシオソウタ』の MV 撮影の準備が進められていく。瓦礫の街の中心にポツンと佇む一台の屋台。屋台の両脇には巨大なスピーカーが置かれた。

独特な世界観だった。

何が始まるのだろうか？

音楽にまるで興味のない京子だったが、コンサートの前ってこんな感じなのかな？ とソワソワした。

自分もこの後、CM 撮影を控えている。

それを考えると、さらにソワソワが止まらなかった。

京子はスタジオの隅に用意された椅子に腰掛けて出番を待った。

『ベシオソウタ』さんが、スタジオ入りまーす！」

スタッフの声がスタジオに響くと、奥の扉が、バーンッと勢いよく開かれた。

『ベシオソウタ』の人影が見えた。

一歩ずつ勇ましく近づいてくるシルエットは、やがて光りを浴び、全貌を見せた。

黒光りしたスキンヘッドにイカつい体。

黒のサングラスをかけ、上半身裸の上に黒の皮のベストを羽織る。

黒の皮のパンツに黒の鋭いブーツ。

全身黒ずくめのスタイルは、悪役レスラーのようだった。

「マスター！？」

京子は椅子から転げ落ちそうになった。

「な、な、何でマスターがここにいるの！？」

落ち着かせようとしていた気持ちが吹っ飛んだ。

「ちわっすー！

『ベシオソウタ』のソウタの方っす！

今日は気合い入れていくんで、よろしくお願いします！」

マスターの後ろから、ヒョコッと顔を出し、スタッフに挨拶をしている。

動画で見た青年だった。

え？

『ベシオソウタ』のソウタの方？

何？ 二人組なの？

てことは... あっ！

『ベシオソウタ』のベシオは、マスターの本名、升田餅子男のベシオってことー？

「はい！ じゃあ MV 撮り行きまーす！

『ベシオソウタ』さん、スタンバイお願いしまーす！」

スタッフの声が響くと、早太はギターのチューニングを済ませ、セットの前に向かった。
マスターはマイクテストをしていた。

「あーあー！
しゃーしゃー！
せい！ せい！」

え？ マスターが歌うの？
じゃあ、あの動画の歌声はマスターだったのー？

早太が屋台の前でギターを構えてスタンバイをすると、マスターは屋台の裏に回った。
悪役レスラーのように決めたマスターの姿は屋台の暖簾に隠れて、すっかり見えなくなった。

屋台ボーカルってそういうこと？

結局どういうことか分からなかった...

.

「はい！ 本番いきまーす！
よーい、スタート！」

いよいよ MV 撮影は始まった。

早太は空に突き上げたピックを、勢いよく振り下ろすと、激しく弦を弾いた。
その姿をカメラが追う。

スピーカーを通して流れ出すギターの音に衝撃を受けた。

感情の嵐のようなギター演奏だった。
さらにマスターの歌声がスタジオ内に響いた。

♪

近くに見えたはずなのに～
気づけば遠く離れてる～

音の振動だけではない、心を揺さぶる歌声だった。

マスターがこんなに歌が上手いなんて知らなかった。

色んな感情が込み上げ、京子は自然と涙が溢れた...

無事『ベシオソウタ』のMV撮影が終わると、忙しく屋台とスピーカーがセットから取り除かれる。

代わりに『さきっぽ生』のCM用に、ガラスのスタンドテーブルが置かれた。

スタッフが京子に声を掛けた。

感傷に浸ってる暇もなく、涙を拭いて立ち上がると、スタンドテーブルの前まで連れて行かれた。

ダメージジーパンに汚れた白のTシャツという衣装。スタッフが仕上げに京子の顔に汚しのメイクを施している最中、監督から演技の確認が入った。

「テーマは覚えてますか？」

「は、はい〜

『地球の渇きさえも潤す奇跡のビール』

です〜」

「はい！

それをイメージして生ビールを飲み干して下さい。そして一言。

『信じられない！』

これだけです」

「は、はい〜」

ビールを飲んでセリフを言うだけの簡単な仕事だと軽く考えていたが、いざその場に立つと、どうやっていいのか急に解らなくなった。

京子はガチガチに緊張していた。

本物の生ビールが、スタンドテーブルの上に置かれる。

京子が深呼吸をすると、監督はモニターを見ながら叫んだ。

「はい、リハ無しでいくよー！
本番よーい！
スタート！」

スタッフはカチンコを鳴らした。

京子はジョッキを掴むと、口元に運び、ゴクゴクと勢いよく生ビールを一気に飲み干した。
実にいい飲みっぷりだった。
そして一言。

「信じらんない〜い」

「カーット！」

すぐさま監督が京子の元へ駆け寄る。

「違う違う！
そんな女子高生みたいな『信じらんない』じゃないんだよー
奇跡のビール！
こんなビール飲んだことない！
『信じられない！』
そういうやつだから」

京子は監督が何を言ってるのか、もう頭に入ってこなかった。

次の生ビールが用意され、テイク2はすぐさま行われた。

「本番よーい！
スタート！」

カチンコが鳴った。

流し込むように生ビールを飲み干す京子。
勢いは変わらない、さすがの飲みっぷりだった。
そして一言。

「♪シンジランナ〜〜イ」

「カーット！」

監督がすっ飛んでやって来た。

「何で歌っちゃうかなー！？
ミュージカルじゃないんだよー
もうこっちが信じられないよー
テイクが続くと自分がキツくなるよ？
大丈夫ー？
もう、演技しようと思わなくていいからねー」

監督がどんなアドバイスを送っても、もう京子には届いていなかった...

テイクは10を越えた。

生ビールを一気し続けた京子は、さすがに酔っ払っていた。
目は座り、真っ直ぐ立って居られなかった。

「ああ〜セリフ入れなきゃ良かった...」

監督は頭を抱え、後悔したが遅かった。

「おいコラ〜！ どした〜！
早くビール持って来〜い！」

ガッシャーン！

京子が手をついたガラスのスタンドテーブルは倒れて碎け散った。

もう撮影どころではなくなった。

フラフラとよろけて、膝がガクッと落ちた瞬間だった。
京子の体をフワッと何かが支えた。

マスターの屈強な両腕だった。

軽々と京子を抱き上げた。

「見せてもらったぞ。
京子のロックンロール」

「...わ、わたしのマンホール？」

その瞬間、京子は意識を失った。

京子を抱きかかえるマスターの背中が大きく、美しいシルエットとなってスタジオから消えていった。

その光景を見て、カメラマンは咄嗟にカメラを回していた...

.

いよいよ『さきっぽ生』が新発売された。

マスコミにも取り上げられ、CM も一斉に放送された。

【さきっぽ生 CM】

ガラスのスタンドテーブルの上に置かれた空のジョッキ。

荒々しくビールが注がれる。

♪

ジャラーン！

『ベシオソウタ』の曲が流れた。

瓦礫の街をバックに、曲の勢いに合わせて生ビールを、一気に飲み干す京子。

もう一度飲み干す京子。

角度を変えてさらに飲み干す。

これでもかと飲み干す。

『信じられない』のセリフはカットされ、飲み干すシーンだけが何度も繰り返された。

ナレーションが入る。

『世界を変える奇跡のビール

もう誰にも止められない

ユウヒ『さきっぽ生』解禁』

テーマはズレてしまったが、上手く編集されていた。

そして、CM の最後に映し出されたのは、京子を抱きかかえるマスターの背中のシルエット。

光りの中へと消えていく、美しい仕上がりになっていた...

.

『さきっぽ生』は発売初日から爆発的な売り上げを見せた。
話題性もさることながら、ビールの美味さも評判となり、病みつきになる人が続出した。
あまりの人気ぶりに、すぐに品薄状態となり、買い占める者、転売する者が後を立たず
『さきっぽ生』は社会現象にまでに発展した。

夕陽ビールは『さきっぽ生』と『中出し生』の二大巨塔を築き、ビール業界 No. 1 の地位を不動のものとした。

CM ソングとして起用された

『ベシオソウタ』の曲は『運命のさきっぽ』
というタイトルに決まり、MV が SNS で一斉に配信された。
『さきっぽ生』ブームと共に、瞬く間に再生回数は 1 位となった。
シングルも発売され『ベシオソウタ』人気は鰻登りだったが、次の曲は発表されることなく解散した...

第14話『アーシャーセー』

ポニービール事件で全焼した

伝道コケ師 BAR

【ラブスラム】

その跡地を夕陽ビールがすべて買い取った。
当時を知る京子監修のもと工事は進められ、店の外観から内装の細部に至るまで、完全に再現された…

間接照明だけの薄暗い店内。
霧がかったお香の煙が漂い、ウッドベースだけの BGM が流れる。
5 席ほどしかない狭いカウンターテーブル。

中央のカウンター席に座り、気だるそうにバーボンのロックをカランコロンと鳴らす、
金髪のモヒカンにド派手な化粧の有雄がいた。

「ここまで完璧に再現出来るなんて本当スゴイと思う。
それは認めるわ京子」

「でしょー？
自分でも良くやったと思ってる」

そう言いながら京子も隣の席で、芋焼酎のロックをカランコロンと鳴らした。

「でもさ…」

有雄が言いかけた瞬間だった。

「アーシャーセー」

かぶせるように言ったのは、カウンターの向かい側に立つ、黒光りのスキンヘッド。

痩せ細った体に袖を切り落とした黒シャツの男は、見るからに雇われ店員だった。

「コレいる？」

有雄が言うと、京子は頷いた。

「一応店だから、誰か立たせとかなないとマズくて、バイト雇ってみた」

「アーシャーセー」

「うるさいわね！

さっきからタイミング違うのよ！」

「ごめんアリチン！

外国の人だからー！ マスター帰って来るまで我慢してー！」

「ったく…」

有雄はバーボンをクイっとやると、溜め息をついた。

「あーあ、

まさか『ベシオソウタ』がマスターのバンドだったなんて…」

「本当！ 私もビックリしたよー！

撮影の時いきなりマスターが現れたんだから！ 何が起きたのか分からなかった！

でもさ、マスターって歌上手いんだね？」

「悔しいけど、それも知らなかったわー！

こんなんじゃ彼女失格だわー！」

「へえ～、マスターって彼女いたんだ～」

「チッ、ムカつく言い方。

あ、そうだ京子、CM 観たわよ！

最後のシルエット。

マスターに抱えられてるの、アレあんたでしょ！？」

「記憶にございません」

「は？

何よ急に政治家みたいな言い訳して」

「違うの、本当に記憶ないの！

あの時、生ビールを10杯以上も一気させられたんだよ？ それでも監督のOK出ないんだよ？

倒れるっつーの！

目が覚めたら医務室で、誰もいなかった」

「アハハー！

何その可哀想なエピソード！

バチが当たったのね～」

「ちょっとー、何のバチよ？」

「マスターに近づく女は皆んな倒してやる！

私の崇りよ！」

「うわ～

ついにアリチン悪霊になっちゃったー！」

「ヴェーー！！」

有雄がゾンビの真似をして、京子に襲いかかろうとした瞬間だった。

バーン！

店の扉が開けられた。

勢いよく入って来たのは、フォークギターを抱えた『ベシオソウタ』の早太だった。

「マスター！

どういうことだよ！？

『屋台をたたむ』って！」

「アーシャーセイ」

「これからだって時に、いきなりそれはねーよ！ 俺はもう何曲も作ってんだぞ！

どーしてくれんだよ！」

「アーシャーセイ」

「なんだよそれ！
答えになってねーよ！」

「あの～、もしもし？」

見かねた有雄が割って入った。

『ベシオソウタ』のソウタくんよね？
どう見てもマスターじゃないと思うんだけど」

「ええ！？
マスターじゃない！？」

落ち着いて見ると、黒光りのスキンヘッドだったが、痩せ細った外人だった。
早太はガックリと肩を落とした。

「マスターはどこにいったんだ。
天狗になったことは反省してるって。
俺一人じゃやってけねーよ…」

その姿を見て、有雄の中の無いはずの母性がくすぐられた。
そっとなだめるように、早太の肩に手を置いた。

「マスターが『ベシオソウタ』だったことにも驚かされたけど、まさかこんなに早く解散
だなんてね…
でもね、マスターの行動には、すべて意味があるのよ。
もしかしたら、ソウタくんには他の人が合うと思ったのかも知れない。
私の名前はアリオ。
歌なら私も歌えるわ。

『アリオソウタ』

このバンドでもう一度、上を目指してみない？」

早太はハッとなり、有雄の全身を見回した。
金髪のコヒカンにド派手な化粧。ピンクの全身タイツに、首周りの白いファーがフワフワとなびいていた。

「すいません。

自分コミックバンド目指してないんで」

「コラー！ 誰がコミックよー！

見る目ないならもう解散！

あんたなんか一人で頑張んなさい！」

組む前から解散を宣言した有雄が、ソッポを向いてバーボンを煽った瞬間だった。

バーン！

またしても店の扉が勢いよく開けられた。

「餅子男ー！

ワシらの『さきっぽ生』すごい人気じゃー！」

ボサボサの白髪頭は綺麗に刈り取られ、お洒落坊主に変わり、作務衣からスーツ姿に変身した、しる爺だった。

手提げ袋から一升瓶を取り出すと、カウンターテーブルにドンッと置いた。

「山形一旨い酒じゃ！

一緒に祝うぞい！」

「アーシャーセー」

「明日にしなせー？

どうしてじゃー？

明日には山形に帰ってしまうぞい」

「オホン」

京子は咳払いをしてから、しる爺に声を掛けた。

「しる爺～」

「ん？

おお！ 京子かー！

京子からも言っとくれー

何で今日じゃダメなんじゃ？」

「しる爺、明日にしなせーなんて誰も言ってない。
そしてよく見て。
餅子男さんじゃないでしょ？」

「なんじゃと？」

しる爺はカウンター越しに痩せ細った外人を見た。

「おぬし誰じゃ！？」

京子はパンッと仕切り直すように両手を叩いた。

「さあ、とりあえず飲みましょう。
あれ？ しる爺、その格好どうしたの？
すごい決まってるけど」

「フォッフオッフオッフ
そうじゃろ？
ワシも今や『ホップ名誉会長』だそうじゃ。
格好ぐらいはちゃんとせんとこのう。
お陰でモテモテじゃ」

「またそんなこと言ってー
調子に乗ってセクハラなんかしちゃダメよ」

「フォッフオッフオッフ
安心せい。
ワシがセクハラするのは京子だけじゃ」

「私もダメだっつーの！」

店内は笑い声で包まれた。
皆んなそれぞれ席に座り、自分の好きな酒で乾杯をした。

バーン！

落ち着く間もなく、店の扉が開かれた。

「ほほう、
こんな小さな店で、あんな素晴らしいビールが造られていたとはな…」

感心しながら店内を見回して入ってくる男。
ブランド物のスーツで身を固め、胸のポケットには赤いバラが刺さっていた。

「さ、佐原社長！」

いち早く気付いたのは京子だった。
慌てて席から立とうとした。
それを佐原社長は手で制した。

『『さきっぽ生』の聖地巡礼というヤツだ。
社長として、一度は見ておかないとな。
あと、それとは別で東くんに直接伝えたいことがあって来た」

佐原社長が改まって京子を見据えた。
京子は座ったままだったが、姿勢を正した。

「今や我が夕陽ビールは、日本一まで昇り詰めた。
これからは、世界の夕陽ビールとしてさらに上を目指していくつもりだ。
その為にはまず、世界的に有名なドイツのビール祭りを日本でもやってみようと思う。

そこで、夕陽ビール初となる
『フェスティバル事業部』
を設立した。
そこの総監督とも言える部長役を...
東くん、君に任せたい」

「ええー！！ 部長！？」

先に驚いたのは、有雄だった。

「ちょちょちょっと社長、そんな大役私には...」

京子も慌てて、身振り手振りで断った。
その姿を佐原社長は、予測していたかのようなだった。

「ハッハッハッ
安心したまえ。
私の目は節穴ではない。

君が今まで積み上げてきた功績の影で、支えてきた人物がいることを私は知っている。
その人物がいれば、君は大丈夫だ。
これからも東くんの支えになってくれるか？

升田くん！」

佐原社長は、しっかりと雇われ外人を見て言っていた。

「アーシャーセー」

.

ブアアアアアーン

青く澄み渡る大空をジャンボ機が飛び立った...

.

ドイツのバイエルン州に降り立ち、ミュンヘン中央駅から歩いて向かうテレージエン
ヴィーゼは、世界一のドイツのビール祭り
『オクトーバーフェスト』
が行われる東京ドーム9個分にもなる大会場だった。

駅から歩いて15分程度の道のりだが、街はすでに世界中から集まった観光客で賑わって
いた。

「社長の愛人ともなると、やっぱり違うわね～
ドイツ旅行だって簡単に来れちゃうんだもの～」

「愛人でもないし、旅行でもない！本場のビール祭りを視察しに来てるの！
これは、歴としたしーごーと！

て、なんでアリチンがいるのよ？」

「フフ、実は私もフェスティバル事業部に入れてもらったのよん。
私の劇団『アリオリオ』がパレードをすれば『夕陽ビール祭り』は、さらに盛り上がり
ますよって言ったら佐原のオジ様、大喜びで迎え入れてくれたわ」

「ちょっと待って！
何なの？ 劇団『アリオリオ』って」

「六本木中のオカマで結成されたエンターティナー集団よ」

「うわ～、ある意味ヤクザより怖いわ～
最近の佐原社長、何でもアリになって来たわね...」

「他人事じゃないわよ、京子。
あんたはフェスティバル事業部のトップよ。
後から入った私の上司にあたるの。
ということはつまり、六本木中のオカマのトップでもあるってことよ」

「うわー！ 絶対ヤダ！」

京子は、パレードの先頭に立つ自分を想像したら寒気がした。

そんな京子を尻目に有雄は、目の当たりにする光景に歓喜の声を上げた。

「ひゃーすごーい！
京子見て見てー！」

テレージエンヴィーゼの大会場を埋め尽くす世界中の人たち。迫力満点の光景だった。

すべての人たちが楽しそうにソーセージをかじりながら、大ジョッキの生ビールを飲んで
いた。

その中でも一際目立つ存在がいた。

腕まくりをした白シャツにハイウエストの黒のスラックス姿。両手に10杯以上のビール
ジョッキを持ち、会場内を華麗に運ぶウエイターたちだった。

「キャー！ カッコイイー！
やっぱり本場のフランクフルトは違うわー」

有雄が好色な顔つきをすると、京子は呆れた。

「何なのその表現？
こんな所まで来て『みこすり昇天拳』とかやめてよね。
日本の恥だから」

「ちょっとー！ 上司だからって言い過ぎじゃない？ 日本の恥だなんて」

「じゃあ、聞きますけど、アリチンのその格好は何なわけ？」

京子が指を差す有雄の格好は、金色の全身タイツ。首周りには白のファーがフワフワとなびいていた。

「ビール祭りでしょ？
だから生ビールの妖精をイメージしてみました～」

「どこが妖精よ！ どう見ても妖怪じゃない！」

「キーッ！ そこまで言うかね！？
もうパワハラよ！ パワハラパワハラー！
シャバダバシャバダバー！」

有雄と京子が、しょうもない小競り合いをしていると大ジョッキを持ったウェイターが近づいてきた。

「ビッテシェーン」

ドイツ版イケメンウェイターは、二人に生ビールの入った大ジョッキを手渡した。

「ダンケシェーン」

京子はスマートに答えた。

手渡された大ジョッキを片手にキョトンとする有雄だった。

「え？ 今何て言ったの？」

「ああ、
ウェイターの人が『どうぞ』で渡してくれたから『ありがとう』で答えただけよ」

「いや～ん！ それってドイツ語でしょ？
悔しいけど、あんたもカッコイイじゃな～い！ ちょっとちょっとー、ありがとうって何て言うの？ 教えてー！

私も言いたーい！」

「ダンケシェーン」

「出来ましえーん！」

フザけて逃げる有雄を京子は追いかけた...

.

腕まくりをした白シャツにハイウエストの黒のスラックス姿。

ドイツ版イケメンウェイターたちが、華麗にビールジョッキを運ぶ中で、さらに一際目立つ存在がいた。

黒光りのスキンヘッド。

イカつい体に袖を切り落とした黒シャツ姿。

他のウェイターたちの倍以上はある 20 杯のビールジョッキを持ち、腕の筋肉の張りを確認しながら生ビールを運ぶ男の姿があった。

.

「あーしゃーせー」

.

大量のビールジョッキは筋トレなのか、誰の元にも運ばれることはなかった...

終わり

マスターゲーム

著 シルマン

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
